

魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

富山県魚津市
出遺跡発掘調査報告書

1997

魚津市教育委員会

富山県魚津市
出遺跡発掘調査報告書

1 9 9 7

魚津市教育委員会



出遺跡出土青磁・白磁・青白磁・青花

序

山と海、そして川、大自然に恵まれた魚津市には、丘陵部を中心
に先史時代の遺跡が多数分布しています。遺跡の発掘調査は、記録
の残されることのなかった時代を知る上で欠かせなく、原始・古代
の歴史は考古学の成果が中心となっています。

近年では、原始・古代だけでなく、中世・近世の遺跡の発掘も郷
土史研究に大きなウエイトを占めるようになっています。従来では
調査の行われることのなかった平野部でも発掘調査が行われるよう
になり、文献記録の少ない地方の歴史の解明も飛躍的に進んできま
した。

国道8号バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査がおこな
われた出遺跡は、これまで遺跡が存在しないと思われていた角川
の沖積地に所在しており、古代から近世にわたる様々な出土遺物は、
この地域の歴史の空白を埋めるものとして注目を集めております。

この発掘調査報告書が地域学習の教材として多くの人々に活用され、
地域の歴史研究と埋蔵文化財保護の意義の理解に役立てば幸い
です。

平成9年3月

魚津市教育委員会

例　　言

1. 本書は魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成8年度出遺跡発掘報告書である。
2. 調査は建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受け、魚津滑川バイパス建設事業に先立ち、魚津市教育委員会が実施した。
3. 調査事務局は魚津市教育委員会社会教育課に置き、文化係が担当した。発掘の作業は社団法人魚津市シルバー人材センターに委託した。
4. 発掘調査期間 平成8年6月3日～10月25日
5. 遺物整理期間 平成9年1月6日～3月26日
6. 調査担当者

試掘調査	越前慶佑 富山県埋蔵文化財センター
	麻柄一志 魚津市教育委員会社会教育課
本 調 査	麻柄一志 魚津市教育委員会社会教育課
	塙田明弘 魚津市教育委員会社会教育課

7. 本書の執筆は1～5までと6のB、Cを麻柄が、6のその他と7を塙田が担当した。遺物の実測、写真撮影は麻柄、塙田、富山大学大学院生近藤美紀がおこなった。このほか報告書作成にあたり、朝野万里子、浦田佳子、野村百合、佐々木友貴子がトレース、拓本、表作成等の作業をおこなっている。
8. 調査期間中及び遺物整理期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。

富山県埋蔵文化財センター 宮田進一、池野正男、斎藤隆、高梨清志、越前慶佑
上市町教育委員会 高慶 孝
有田町歴史民俗資料館 村上伸之
9. この調査で設定した基準杭は国土座標を用い、水平基準は標高である。
10. 出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。



目 次

序	
例 言	
1. 調査の経緯	1
(1)分布調査	1
(2)試掘調査	2
(3)本 調 査	5
2. 位置と自然環境	6
3. 周辺の遺跡と歴史的環境	6
4. 所 位	7
5. 遺 構	9
(1)井 戸	9
(2)七 坑	11
(3)溝	11
(4)柱穴状坑ビット群	11
6. 遺 物	12
A. 土器・陶磁器	
(1)弥生～古代（奈良・平安時代）	12
①弥生土器	12
②須恵器	12
(2)中世（鎌倉・室町時代）	
①土師器皿	15
②珠 洲	16
③瀬戸美濃	20
④中国製磁器	21

(3)近世（江戸時代）以降.....	23
①肥前系陶器.....	23
②伊万里.....	29
③越中瀬戸.....	33
④瓦 器.....	40
⑤瀬戸 美濃.....	40
(4)その他の陶器.....	41
 B. 石器・石製品.....	43
 C. 土 製 品.....	44
 D. 木 製 品.....	46
 E. 金 属 製 品.....	47
 F. 出土遺物の検討.....	48
 7. 調査のまとめ.....	49
 図 版.....	59

1. 調査の経緯

富山県を東西に横断する一般国道8号は、新潟を起点として北陸の主要都市を経由し、京都市に至る日本海沿岸を縦貫する幹線道路として、沿線地域の産業・経済の大動脈として沿線住民にとって重要な道路である。そのため交通量が多く、混雑解消のため、全線で整備がおこなわれている。魚津市内では全域でバイパス工事が計画されており、魚津市江口～住吉の魚津バイパスが暫定2車線供用されており、魚津市住吉～滑川市稻泉の魚津滑川バイパスの用地買収が進められている。

(1) 分布調査

平成7年3月、建設省北陸地方建設局富山工事事務所は、富山県教育委員会に国道8号魚津滑川バイパス建設予定地の内、平成8年度以降の事業実施予定地の埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会をおこなった。これに対し、富山県教育委員会は富山県埋蔵文化財センターを担当とし、魚津市教育委員会と合同で分布調査を実施した。調査は道路の設計及び杭打ちの完了している平成5年度分布調査実施地点の西南側の約1.2kmの範囲を対象とし、平成7年3月22日に行った。

調査担当者は下記のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター 企画調整課長 宮田進一

“ 文化財保護主事 高梨清志

“ 文化財保護主事 河西健二

魚津市教育委員会社会教育課文化係 学芸員 麻柄一志

この分布調査は、魚津市慶野、山、佐伯、古野地内を対象に、路線内及びその周辺の表面採集を行うことで遺跡の確認を行ない、従来知られていた佐伯遺跡、山下遺跡、山下遺跡等の範囲確認に併せ、出地内及び吉野地内に2カ所の新遺跡を発見した。新発見の遺跡の名称は、平成5年度に実施した分布調査に習い、出地内の遺跡をUNB-2遺跡、古野地内をUNB-3遺跡と仮称した(第1図)。UNB-2遺跡は出地内に所在するので、遺跡台帳には出遺跡で登録し、以後『山遺跡』と呼称することにする。また、UNB-3遺跡は吉野地内の所在なので『古野遺跡』と称することにする。

UNB-2遺跡からは土師器、越中瀬戸、伊万里の破片が数点採集され、古代から近世の遺跡と考えられた。分布調査から推定された山遺跡の面積は、約10,000m²で、路線内の面積は約6,000m²と推定された。出遺跡の所在する山地内は角川の扇状地の一角で遺跡の存在は予想されていなかった。従来の遺跡地図では西側の河岸段丘上にのみ遺跡の分布が認められ、扇状地上は予定外のことであった。平成5年度の分布調査で発見され、平成6年度に試掘調査が実施された慶野遺跡(UNB-1遺跡)がやはり角川の扇状地上に立地し、扇状地でも微高地に中世以降の遺跡が存在することが確実で、今後の開発計画に扇状地でも充分な注意が必要であることを示したといえる。



第1図 出遺跡と周辺の遺跡(1/10,000)

1. 出遺跡
2. 摩野遺跡
3. 佐伯遺跡
4. 山下遺跡
5. 山下II遺跡
6. 吉野遺跡

(2) 試掘調査

平成7年4月に分布調査の概要報告が富山県埋蔵文化財センターによって纏められ、この報告書に基づき、平成7年5月、建設省北陸地方建設局富山工事事務所、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、魚津市教育委員会社会教育課は、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、魚津市教育委員会が事業主体となってUNB-2遺跡、佐伯遺跡、山下遺跡の試掘調査を実施し、富山県埋蔵文化財センターから文化財保護主事の派遣を受けることになった。

この協議に基づき、平成7年7月、魚津市と建設省北陸地方建設局富山工事事務所は埋蔵文化財の試掘調査についての委託契約を締結し、7月10日から9月1日までの予定でUNB-2遺跡外2遺跡の試掘調査を実施した。

試掘調査の担当者は下記のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 越前慶祐

魚津市教育委員会社会教育課文化係 学芸員 麻柄一志

試掘調査の対象面積は、分布調査で遺跡の範囲と推定された水田部分の内、8号バイパス建設に係る7,231m²である。試掘調査は重機を使用して耕作土を除去し、遺物包含層（黒褐色粘質土）を重機で薄く剥ぎ取りながら、遺物の有無を確認した。掘削は黒褐色粘質土の下の砂質土までおこない、地表面の精査は人力で行った。トレントは地形や土地区画に合わせ、任意に14カ所に設定し、掘削時及び廃土中の遺物の発見と収集に努めた。遺物は第1トレントから第7トレントまでの間の第6トレントを除く全てのトレントから出土し（第2図）、遺物は古代から近代にまで及んでいる。

遺跡の層位は各トレントとも約20cmの耕作上の堆積が認められ、第4～第8トレントではその下に暗褐色の粘質土が認められ、砂層、砂礫層の堆積が続く。第2、3トレント、さらに第9～11トレントでは耕土の直下が砂層となっており、第1トレントでは耕土の下に暗黄褐色砂質土または黄褐色砂質土が堆積し、砂層に続く。遺物は耕土及び暗褐色粘質土、黄褐色砂質土等から出土しており、砂層、砂礫層からの出土は認められなかった。また第2トレントおよび第5トレントの砂層上面で遺構を検出しており、砂層または砂礫層の上面を遺構面としており、遺構面は1枚と判断した。なお第12～14トレントは耕作土の下に水分を多量に含んだ粘土層が厚く堆積しており、溺水が激しく、かつて湿地だったという地元の話と一致している。

出土遺物の主なものは、平安時代の須恵器（第3図1、2）が第2、第7トレントから出土し、中世の上飾器、青磁、珠洲（第3図3、4、5）が第2、第4、第5、第7トレントから出土し、中世末から近世の越中瀬戸、肥前陶器（第3図6、7）が第1～4トレントから出土している。これらのことより、分布調査で遺跡の範囲と推定された部分の北側約5,400m²が本調査の対象となり、遺跡の年代は平安時代から近世にわたると考えられる。なお、耕土出土及び表面採集の近代の陶器もあり遺跡の存続期間はかなり長期におよぶ。特に遺跡の北端は近代の陶器の散布が著しいが、隣接地に民家があることから民家の使用物の可能性もある。



第2図 試掘トレンチの配置と遺物の出土状況 (1/1500)

以上の結果をふまえて試掘調査の報告では、遺物の出土地点と地形から判断して、遺物の出土した第1～5、7トレンチを含むやや小高い水田一帯の5,900m²が、バイパス建設工事に伴う記録保存を目的とした発掘調査が必要とされた。

(3) 本調査

試掘調査の報告に基づき、富山県教育委員会、魚津市教育委員会、建設省富山工事事務所では平成7年10月より協議を重ねた。その結果、バイパス建設工事を予定どおり進めるには、出遺跡を含めた工事予定地内の遺跡の発掘調査に平成8年度より着手しなければならないことは共通の認識となった。しかし、富山県教育委員会、(財)富山県文化振興財団、魚津市教育委員会のいずれも調査員の余裕がなく現状では、発掘調査を受託できないことから、魚津市では平成8年4月より、発掘調査のための専門職員を1名採用し、平成8年度の発掘調査は魚津市が実施することで合意した。

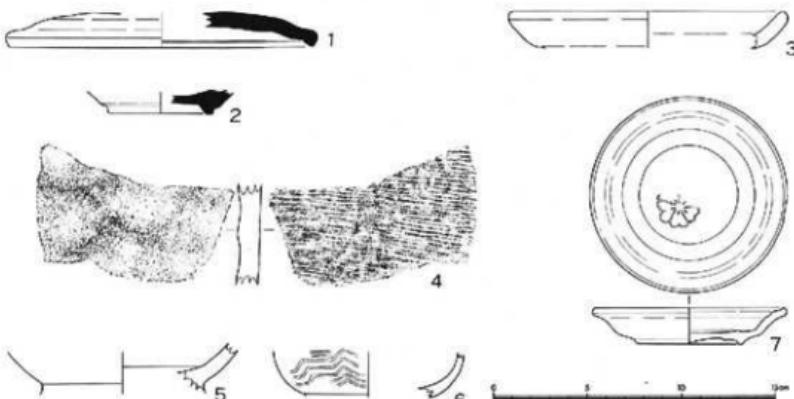
発掘調査は平成8年度予算の成立の遅れから、平成8年6月3日付けで委託を受け、契約書を締結し、同日より着手した。調査は魚津市教育委員会社会教育課に事務局を置き、下記の者が担当した。

魚津市教育委員会社会教育課文化係 学芸員 麻柄一志

〃

塙田明弘

作業はまず、重機による表土剥ぎ、杭打ち、休憩用プレハブ設置などをおこない、6月10日から、(社)魚津市シルバー人材センターから派遣された作業員による発掘作業を開始した。作業は基本的に試掘で地山とみなした砂層の上面まで手掘りで行い、遺構検出をおこなった。排水にはベルト・コンベアを使用した。発掘調査は10月21日に終了し、10月25日にプレハブ等の撤収を完了した。



第3図 試掘調査の出土遺物

1・2 須恵器、3 土師器、4 珠洲、5 青磁、6 肥前陶器、7 瀬戸中瀬戸

2. 位置と自然環境

遺跡は魚津市の西部、上中島地区の出地内に所在する。出地内でも最北端に位置し、慶野地内に接している。遺跡は角川の扇状地上に立地し、河岸段丘の真下にある。角川の左岸に発達した河岸段丘は、南から北に細長く延びているが、慶野地内で沖積扇状地に没し、遺跡はちょうどその境付近に広がっている。遺跡の標高は約14~13mで、出地内では最も高く、南側及び東側に向かって低くなっている。遺跡の東側の角川の堤防沿いでは標高が10m未満の地点もあり、比高差は3~4mを測り、近代以降もしばしば繰り返された角川の氾濫においても、遺跡が冠水することは希であったという。

遺跡の西側は段丘崖が存在しており、その西に広がる段丘面とは比高差が2.5~7mを測り、南側ほど比高差が著しく、北側では段丘崖は市道慶野湯上線にぶつかって消えており、段丘と沖積扇状地の境界は不明である。段丘面の傾斜は比較的きつと、角川に沿って上流では30m以上の段丘崖がそびえる。

遺跡の平面地形は、西→東、北→南に傾斜している。北→南の傾斜は角川の流れに逆行しているが、遺跡の地山面の砂層及び砂疊層が北から南への堆積を示しており、旧地形に沿った傾斜である。また、地山にみられる疊層に含まれる岩石は花崗岩が主体であり、早月川の堆積作用によるものと考えられる。つまり河床の高い早月川の洪水によって、角川の扇状地の一部にまで土砂を運んでいることがわかる。現在の用水も遺跡周辺では角川ではなく、早月川の水を利用している。

遺跡の南及び東側は低地のため水はけの悪い湿地で、稲作にはあまり向いておらず、近年は蓮根の栽培がおこなわれており、出地区的特産品となっている。しかし、遺跡付近は水田で比較的水捌けがよく、稲作に適した土壤である。

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

遺跡の所在する上中島地区は、地区の大部分が角川と早月川に挟まれた河岸段丘、上中島台地が地区的中心部を占めている。そのため遺跡もこの台地上に集中しており、特に角川に面した台地東部に並んでいる。

出遺跡の南側の洪積台地（河岸段丘）上には、縄文前期・中期、弥生中期・後期、奈良・平安、鎌倉・室町の各時代にまたがる佐伯遺跡（第1図3）、縄文時代前期の山下遺跡（第1図4）、縄文時代中期・鎌倉・室町時代の山下遺跡（第1図5）、鎌倉・室町時代の古野遺跡（第1図6）が並び、さらに南側には後期旧石器時代から中世までの複合遺跡で、広大な面積を占める早月上野遺跡がある。

また、出遺跡と同じ沖積地（角川の扇状地）には北側に室町時代の慶野遺跡（第1図2）が發

見されているが、そのほかは知られていない。しかし、慶野遺跡は国道8号バイパス建設事業に伴う分布調査、試掘調査でようやく発見されており、周辺の精密な分布調査で今後遺跡が更に発見される可能性は高い。

さて、出村は『下新川郡史稿』によれば、出源太郎という浪人によって開かれたと伝えられているが、記録としては加賀藩領となった江戸時代以降のものがあるにすぎない。なお、遺跡の隣接する慶野は、同じく『下新川郡史稿』によれば、永享年間に飛彈の与三左衛門が開拓したと伝えられている。角川の氾濫のため出村の村高はしばしば変動しており、洪水の多さを物語っている。出村の東側を流れる角川は天井川で用水は大部分が角川出用水を使用しているが、やや小高い調査地内は早月川下江用水を使用している。

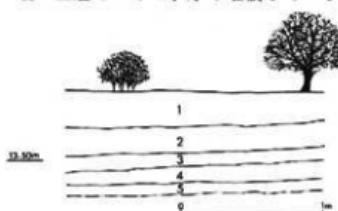
発掘調査地は現在では、出地内であるが、藩政期から大正初期までは川津村と称し、戸数は1戸であったが、出村に編入されて現在に至っている。寛文10年の村御印では村高71石、免4.1（高物成帳写）、天保11年では村高71石、免4.1（杉木文書）と変化がない。また、戸数は明治を通して1戸であった。

4. 層位

遺跡の層序は地点によってかなり異なるが基本的には、暗黄褐色の耕作土が約15~25cm堆積し、その下に遺物を含む暗褐色土が10cmから50cmが堆積し、地山（砂層または砂礫層）に続く。X220列、Y568~570の土層を模式図として示す（第4図）。第1層の耕作土は重機で除去したため存在しないが、試掘調査の記録と合致である。遺物の出土する暗褐色土層は、この地点では第2~4層の3層に細分できる。第2層はビニール屑等が混入しており、現代の堆積土層と考えられる。遺跡において近年、小規模な圃場整備が実施されているため、削平と再堆積が所々に認められる。第3・4層は遺物包含層で、ほとんどの地点では第4層が確認できない。5層は地山とした砂質土層で、地点によっては礫層の場合もある。

地山の砂層、砂礫層、礫層の堆積は複雑で、場所によってだが、深堀では、砂層、砂礫層、礫層が互層をなして、厚く堆積していることが確認できる。第5図は遺跡北西隅の砂礫層の断面で

あるが、遺物包含層の直下に砂層、砂質土層が堆積し、第14層の黒褐色粘質土層を挟み、その下に砂礫層、砂層が続く。なおこの地点は砂礫層からの湧水が激しく、約140cmの深さまでしか実測できなかった。この地点は発掘区の西端で、段丘崖に接しており、そのため、段丘崖側から流れ込んだ第14層の黒褐色粘質土が薄く帯状に堆積している。この黒褐色粘質土は平面では、幅10~15の崖に沿って走る帶状



1. 黒褐色粘質土層
2. 黒褐色粘質土層(やや明)
3. 黒褐色粘質土層
4. 黒褐色粘質土層
5. 黒褐色砂質土層

第4図 土層模式図

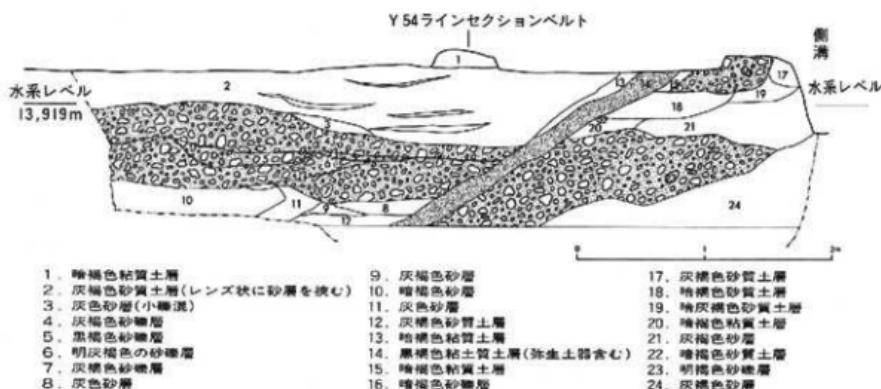
の土層として確認されていたが、断面では斜めに堆積しており、旧地形が谷状に西から東に傾斜していたことがわかる。黒褐色粘質土はX232~259、Y538~540の狭い範囲でしか認められない。また、この黒褐色粘質土からは弥生土器、古式土師器の破片が出土しており、段丘上に弥生～古墳時代の遺跡が存在する可能性がある。少なくとも弥生～古墳時代までは段丘の比高差が今以上にあったことを示している。

第14層の黒褐色粘質土層中の弥生土器、古式土師器が後世の流れ込みでないかぎり、第16層以下の砂質土層及び砂礫層は弥生時代以前の堆積で、第2層～第12層までの砂質土層及び砂礫層は古墳時代以降の堆積ということになる。なお、第4層の砂礫層中からは小破片であるが、須恵器が出土しており、第4層以上の堆積が平安時代以降である。弥生時代から古墳時代前期には、段丘の下に深い谷が存在し、黒褐色土が堆積する安定した時期があったと想定できよう。その後、平安時代以降の洪水により、砂礫層が谷を埋めたものと考えられる。

しかし、発掘区の中央やや西よりの地点では地山面の黄褐色砂質土の上面に須恵器がへばりつくようにまとまって出土し、さらに、この黄褐色砂質土に柱穴と見られるビットが多数据り込まれており、少なくとも平安時代には安定した生活面であった可能性が高い。

なお、発掘区の北東部には地山として黄褐色砂質土層が堆積しているが、この黄褐色砂質土層はやや砂の粒が粗くあまり締まっていない。色調も白黄色に近い。この層に掘り込まれた遺構はすべて近世の構築で、黄褐色砂質土層の上面からの出土遺物はすべて近世の陶磁器類である。地山の黄褐色砂質土層からの出土遺物はないが、近世以前の堆積で、比較的新しい洪水による堆積物の可能性がある。

遺跡中央部に北西隅から南東に向けて堆積している砂礫層を境に北東部は近世の黄褐色砂質土層が、西部は古代以前の黄褐色砂質土層が堆積しているといえよう。なお、砂礫層の堆積時期については、不明である。



第5図 X244、Y538~543 深掘土層図

5. 遺構

出遺跡において、検出された遺構は、土坑、井戸、柱穴状ビット群にすぎない。これらの遺構も併出遺物がほとんどなく、時期が判明しているものは少ない。周辺の出土遺物から判断して平安時代から近世までの時代幅があると考えられる。遺構は付図に示したように、発掘区の北東部と中央部やや西寄りにまとまっているが、北東部の遺構はほとんどが近世と考えられ、中央部やや西寄りに集中する柱穴状ビット群は古代のものと考えられる。これは出土遺物の分布より判断したもので、近世の肥前陶磁、越中瀬戸の出土分布と北東部の遺構群の分布が一致し、古代の須恵器の出土分布と中央部やや西寄りに集中する柱穴状ビット群の分布がほぼ一致することから、遺構の年代も妥当と考えられる。

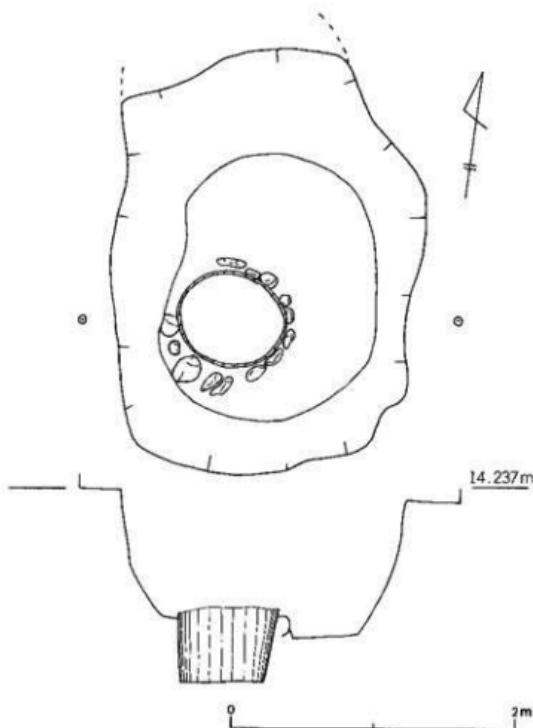
なお、遺跡全体は小規模な圃場整備や出直しと呼ばれる個人での土木工事が何度も行われた痕

跡が認められ、一部の地山面にはキャタピラの跡が確認できる。中央部から南部にかけて削平は頗著で、耕上の直下が地山面という地点も珍しくない。既に削平されてしまい、確認出来ない遺構も多いとみられる。

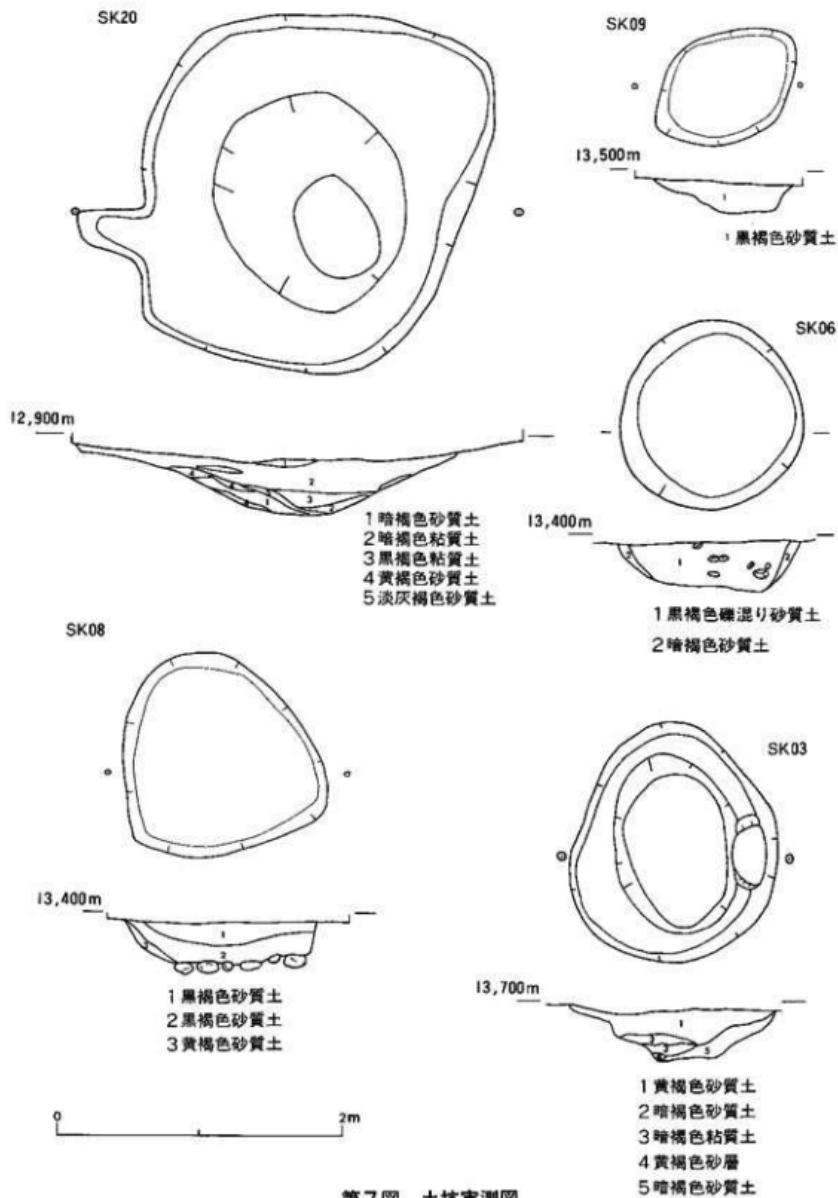
(1) 井戸 (第6図)

井戸は1基のみ検出されている。素掘りの長径約3m、短径約2m、深さ約1mの椭円形の掘り方の底部に桶を設置したものである。掘り方は砂礫層に掘り込まれ、桶は径75cm、高さ50cmで、掘り方の南北隅に埋め込まれ、上部には桶の外側に砾を配置している。掘り方の埋土には近世の陶磁器が多数含まれていたが、埋設された桶の埋土からの出土遺物はない。

出土遺物からこの井戸は、近世のものと考えられる。埋土は土砂、砾、陶磁器等が投げ込まれた状態で出土しており、人為的



第6図 井戸 (SE01) 実測図



第7図 土坑実測図

に埋められたと考えられる。井戸は黄褐色砂質土から掘り込まれているが、黄褐色砂質土は約20cmで砂礫層に続き、掘り方の底は暗褐色砂層が堆積している。井戸底に埋め込まれた桶はこの砂層に埋設されている。井戸の底の暗褐色砂層からは現在でも湧水が認められることから、井戸としての機能はこの深さで充分であったことがわかる。

(2) 土 坑 (第7図)

土坑は合計25基検出されている。このうち遺物が出土している土坑は2基で、SK04からは、越中瀬戸、SK20からは土師器の小破片が出土している。この土師器は中世と考えられる。SK04は楕円形の土坑で、深さは十数cmにすぎない。SK20は径が約3mと出土遺跡の中では大きい土坑であるが、底はすり鉢状で、形状も不整形である。このほか主な土坑を図示したが、SK08にみられるように土坑底部に礫の堆積が認められるものがあるが、ここにみられる礫は地山の礫層の上面が露出したものである。これらの土坑は遺物が出土していないため、年代は不明である。

(3) 溝

溝は調査区の北東部で、3本検出されている。SD01とSD02はいずれも深さが10~15cmと浅く、埋土は暗褐色土である。水の流れた痕跡は認められない。出土遺物はなく、年代や遺構の性格は不明である。SD03は発掘区の東北隅に検出された。幅約1m、深さ約40cmで埋土は砂層である。出土遺物は豊富で、伊万里、肥前系陶器、越中瀬戸などが出土しており、近世の遺構と考えられる。

(4) 柱穴状ビット群

発掘区中央西寄りに多数検出されている柱穴状ビット群は、確認されている柱穴だけでは掘立柱建物の復元はできない。柱穴状のビットは径が約20~40cmほどで、深さは約15~45cmとバラエティに富む。しかし、近くで連続する柱穴が同一規模であることはなく、不規則である。先にも述べたように、既に削平が著しいことと須恵器が柱穴状ビット群の周辺にまとまって出土することから、何らかの遺構が存在していた可能性は高い。また、一部では柱穴が數本並ぶものもあり、建物の一部であると考えられる。

6. 遺 物

今回出土した遺物は造構に伴うものが少なく、大半が包含層からのものであった。このため出土遺物の年代は従来の編年観に依拠せざるを得ない点をことわっておく。

A 土器・陶磁器

(1) 弥生～古代（奈良・平安時代）

① 弥生土器（第8図1～3）

弥生土器は体部破片がほとんどであり、岡化できたのは3点のみである。また造構に伴うものは無く、すべて包含層（黒色土）からの出土である。弥生時代中期の櫛描文系の土器や縄文が施された天干山式土器、後期から古墳時代初頭にかけての複合口縁を持つ土器が見られた。

1は壺で、口径は16.2cmを測る。口縁部は外反して外上方に開く。口縁端部外側には一角刺突文が施されているが、明瞭に残るもののが一つであるため、刺突間隔は不明である。内外面ともに撫で調整を行う。色調は明黄色を呈する。弥生時代中期に位置づけられる。

2は壺で、口径は22.6cmを測る。口縁部は外反して外上方に開き、口縁端部外側には櫛描刻目文が施される。内外面ともに刷毛目調整を行う。色調は淡黄色を呈する。弥生時代中期に位置づけられる。

3は壺の有段II縁部である。内外面ともに撫で調整を施す。外面は表面の剥離が著しい。色調は赤褐色を呈する。弥生時代後期に位置づけられる。

② 須恵器（第8図4～12・第9図）

出土した須恵器は、壺・杯・甕・蓋などがあり、調査区中央部西側に集中して見られた。（「出土遺物の検討」参照）ただ体部破片が多数で、岡化に耐えるものは僅かである。造構に伴うものは無く、包含層（暗褐色土）からの出土である。所産時期として8世紀後半から9世紀代まで確認出来た。

杯蓋（第8図4～6）

4は杯蓋である。口縁端部を内側に折り曲げている。焼成不良のため茶褐色を呈する。

5は杯蓋である。口径は11.7cmを測る。頂部内面は回転撫で調整、外面は窪削りを行った後、撫で調整で仕上げている。口縁端部は下方に折り曲げ、断面三角形を呈する。9世紀代に位置づけられる。

6は杯蓋である。口径は13.0cmを測る。頂部内面は回転撫で調整、外面は窪削りを行った後、撫で調整で仕上げている。II縁端部を折り曲げ、内側に丸め込む。9世紀代に位置づけられる。

杯身（第8図7～9）

7は杯身底部である。高台径は4.8cmを測る。内外面に撫で調整を施す。付高台が欠損して

いる。

8は杯身底部である。高台径は7.6cmを測る。内外面ともに回転撫で調整を施す。

9は杯身である。底径は8.4cmを測る。内外面ともに回転撫で調整を施す。底部は窓切りした後撫で消している。

壺（第8図10~11）

10は有台の壺の底部である。底径11.0cmを測る。脚部は器壁が薄く深く折り返している。内外面ともに撫で調整を施す。8世紀後半に位置づけられる。

11は壺の口縁部である。口径は22.0cmを測る。内外面ともに回転撫で調整を施す。口縁端部は水平に面を取る。9世紀代に位置づけられる。

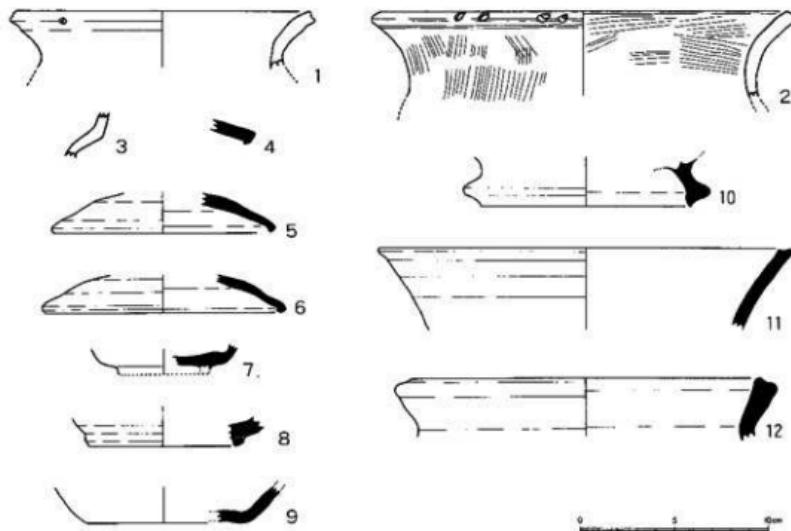
甕（第8図12、第9図12~18）

12は甕の口縁部である。口径は20.2cmを測る。焼成不良により、茶褐色を呈する。9世紀代に位置づけられる。

13と14は甕の頸部にあたり、口縁部が欠損している。

15~17は甕の体部である。外面には平行叩き、内面には同心円紋を施す。

18は甕の頸部及び体部である。頸部の直径は20.8cmを測る。体部外面には平行叩きの後にカキ目調整を行い、内面には同心円紋を施す。



第8図 弥生土器・須恵器

1 弥生土器壺、2.3 弥生土器甕、4~6 須恵器杯蓋
7~9 須恵器杯身、10~11 須恵器壺、12 須恵器甕



第9図 須恵器(1/3)

13-18 須恵器斐

(2) 中世（鎌倉・室町時代）

① 土師器皿（第10図1～11）

土師器皿は、包含層からの出土である。体部破片が多いが出土量は少ない。遺物の年代観は宮田進一氏の編年に依拠した。所蔵時期は14世紀から16世紀まで確認出来た。

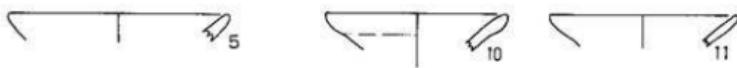
1は口径13.0cmを測る。体部は直線的に開き、口縁端部は面を取っている。口縁部に一段の横撫でを施し、内面は横撫で調整を行う。焼成は良好である。色調はくすんだ浅黄色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。14世紀代に位置づけられる。

2は口縁部に1段の横撫でを行い、端部を尖らせる。体部は直線的に開く。色調は黄橙色を呈し、胎土は密で、焼成良好である。15世紀代に位置づけられる。

3の体部は直立気味に立ち上がり、口縁端部に一段の横撫でを調整を行なう。内面にも横撫で調整を行なう。色調は浅黄色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含み、密である。焼成は良好である。15世紀代に位置づけられる。

4の体部は直線的に開き、口縁部に一段の強い横撫でを施している。内面は横撫で調整を行う。色調は乳白色を呈する。胎土は小石・砂粒をわずかに含み、密である。焼成は良好である。15世紀代に位置づけられる。

5は口径11.6cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、内外面に横撫でが施されている。焼成は良好である。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。15世紀代に位置づけられる。



0 2 10 12cm

第10図 土師器・瓦器(1/3)

1～11 土師器皿、12 瓦器火桶蓋、13 火桶

6は口径7.6cmを測る。体部は内湾気味に短く立ち上がり、一段の横撫でが施されている。内面は横撫で調整を行う。焼成は良好である。色調は黄橙色を呈し、胎土は砂粒を少量含み、密である。15世紀代に位置づけられる。

7は口径7.2cmを測る。体部は直線的に開き、口縁部に一段の横撫でを施し、内面にも横撫で調整を行う。焼成は良好であり、色調は浅黄色を呈する。胎土は密である。15世紀代に位置づけられる。

8の口縁端部は上へ小さく摘み上げている。端部下を指でやや強く押さえているため、口縁端部が帯状になっている。内面は横撫で調整を施す。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は小石・砂粒をを少量含み、やや粗い。焼成は良好である。16世紀代に位置づけられる。

9の体部は直線的に開き、口縁部に一段の強い横撫でを施している。内面には横撫で調整を行う。色調はにぶい浅黄色を呈し、胎土は小石・砂粒をわずかに含み、密である。焼成良好である。16世紀代に位置づけられる。

10は口径9.6cmを測る。体部は直線的に開き、口縁部に一段の横撫でを施し、端部を小さく摘み上げている。横撫での下を強く指で押さえているため、口縁端部が帯状になっている。内面は横撫で調整が施されている。焼成は良好である。色調は浅黄色を呈し、胎土は小石・砂粒を多く含み、密である。16世紀代に位置づけられる。

11は口径9.8cmを測る。焼成は良好である。色調は黄橙色を呈し、胎土は密である。体部は直線的に開く。調整は磨滅のため不明瞭である。16世紀代に位置づけられる。

② 珠洲（第11・12図）

出土した珠洲は壺・壺・擂鉢であるが、擂鉢以外は体部破片のみである。遺構に伴うものは無く、全て包含層からの出土である。遺物の年代観は吉岡康暢氏の編年に依拠した。所産時期は13世紀後半から15世紀代まで確認出来た。

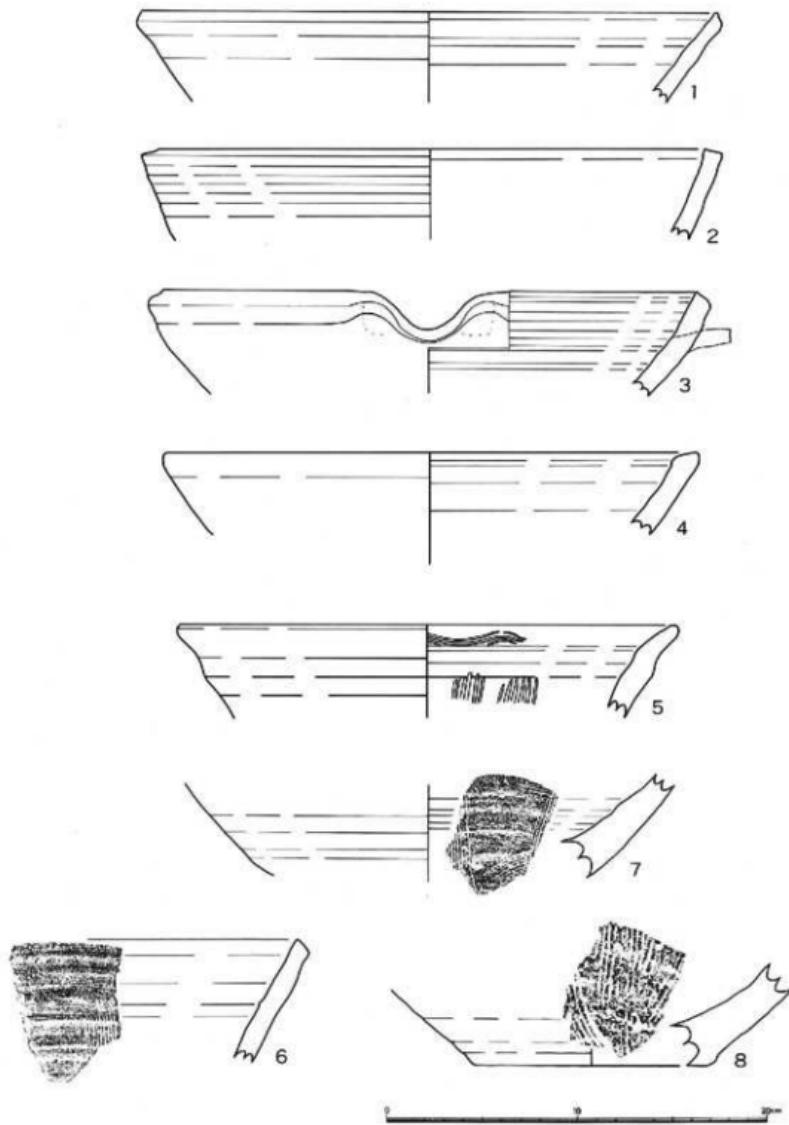
擂鉢（第11図）

1の口径は約30.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外傾して方頭を呈する。焼成は還元硬質であり、色調は青灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。珠洲Ⅲ期に属し、13世紀後半のものと考えられる。

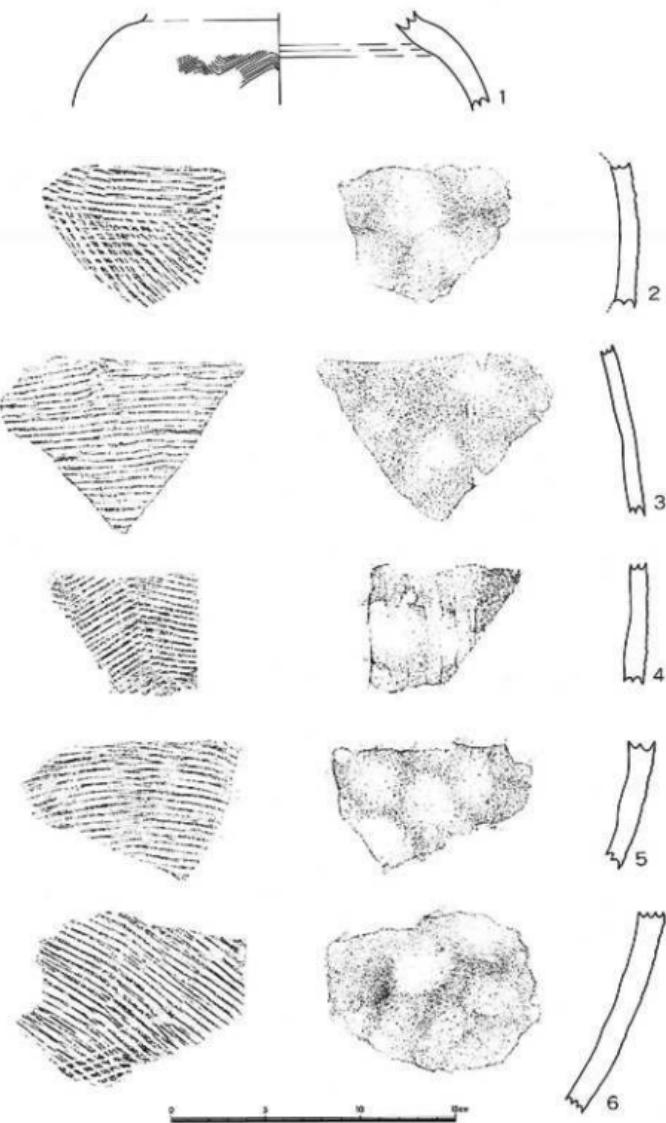
2の口径は30.4cmを測る。やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外傾して方頭を呈する。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。内外面に撫で調整を行う。珠洲Ⅳ期に属し、13世紀末～14世紀代のものと考えられる。

3の口径は約28.0cmを測る。体部は内湾気味に膨らみをもって立ち上がり、口縁端部は外傾して方頭を呈する。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は小石・砂粒を少量含み、密である。口縁部外面の一部にすが付着している。珠洲Ⅳ期に属し、13世紀末～14世紀代のものと考えられる。

4は擂鉢である。口径約28.0cmを測る。口縁端部はやや内傾して面を取っている。焼成は還



第11図 珠洲擗鉢(1/3)



第12図 珠洲(1/3)

1 巻、2~6 壺・壺

元硬質であり、色調は灰色を呈する。全体に摩耗が激しく、胎土は小石を多く含み、粗い。珠洲IV期に属し、13世紀末～14世紀代のものと考えられる。

5は口径約26.4cmを測る。口縁端部は大きく内傾して面を取り、4条単位の波状文が施される。内面には2cm幅の卸目が2帯確認でき、1帯あたりの条数は6条である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は小石を多く含み、粗い。珠洲VI期に属し、15世紀後半のものと考えられる。

6の体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外傾して外側にやや引き出している。内面には比較的細かい卸目が1条確認できる。焼成は還元硬質であり、色調は青灰色を呈する。胎土は砂粒を少量含み、密である。珠洲IV期に属し、13世紀末～14世紀代に属する。

7は内面に比較的細かい卸目が4条確認できる。焼成は還元硬質であり、色調は青灰色を呈する。胎土は焼成によって3層に分かれており、小石・砂粒を少量含み、密である。

8は内面に粗い卸目が3条確認できる。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。一部にすすぐ付着している。胎土は小石・砂粒を多く含み、粗い。

壺・甕(第12図)

1は壺である。肩部に一段の櫛描波状文が施されており、一帯の条数は6～8条である。頸部に自然釉が付着しており、焼成は還元硬質である。色調は灰色と青灰色を呈し、胎土は小石・砂粒を少量含み、密である。

2は甕の体部破片である。外面に叩きが綾杉状に施され、内面には当て具痕が残る。叩き目の原体は3cm幅に8条を数える。焼成は還元軟質であり、色調は暗赤褐色を呈する。胎土は小石・砂粒を少量含み、密である。

3は甕か壺の体部破片である。外面に平行叩き目が施され、内面には当て具痕が残る。叩き目の原体は3cm幅に7条を数える。外面全体にすすぐ付着しており、焼成は還元硬質である。色調は青灰色を呈する。胎土は焼成によって中位が赤味を帯びており、小石・砂粒を含み、やや粗い。

4は甕の体部破片である。外面に叩きが綾杉状に施され、内面の当て具痕の上に箇削り調整を行う。叩き目の原体は3cm幅に10条を数える。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は小石・砂粒を少量含み、密である。

5は甕の体部破片である。外面に平行叩き目が施され、内面には当て具痕が残る。叩き目の原体は3幅に7条を数える。焼成は還元硬質であり、色調は青灰色を呈する。胎土は焼成によって3層に分かれており、小石・砂粒を含み、やや粗い。

6は甕の体部破片である。外面に平行叩き目が施され、一部斜めに叩き目が入る。内面には当て具痕が残っており、叩き目の原体は3cm幅に7条を数える。焼成は還元軟質であり、色調は暗赤褐色を呈する。胎土は小石・砂粒を少量含み、密である。

③ 濑戸美濃 (第13図)

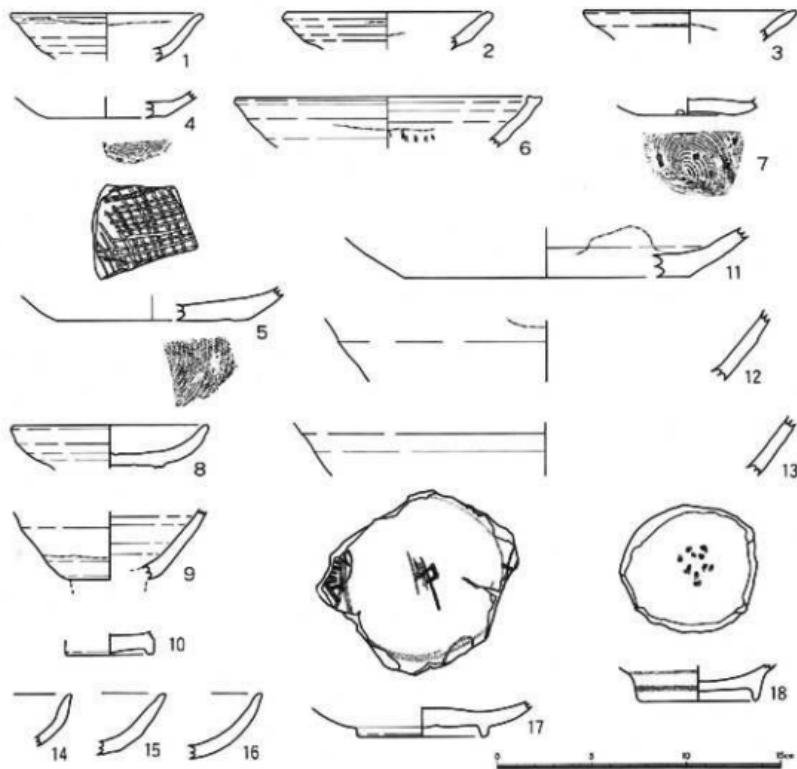
瀬戸美濃は、全て包含層よりの出土である。遺物の年代観は藤澤良祐氏の編年に依拠した。所産時期は14世紀末から16世紀後半まで確認出来た。

皿 (1~8)

<窯窓期>

1は縁釉小皿である。口径は10.0cmを測る。体部は直線的に開き、内面と口縁部外面に回転撫で調整を行なう。口縁端部に灰釉を施すが、2次比熱を受けている。14世紀末から15世紀前半に位置づけられる。

2は縁釉小皿である。口径は10.6cmを測る。体部は直線的に開き、内外面に回転撫で調整を行なう。口縁端部に灰釉を施すが、内面には見込近くまで掛けられている。14世紀末から15世紀前半に位置づけられる。



第13図 濑戸美濃(1/3)

1~4 縁釉小皿、5~6 卵皿、8 九皿、9~10 天目茶碗、11~13 盤類、14~16 志野丸皿
17 染付皿、18 染付碗

3は縁軸小皿である。口径は11.0cmを測る。体部は直線的に開き、内外面に回転撫で調整を行う。体部外面の横撫でが強く、口縁端部が帯状になっている。口縁端部外面から内面中位まで灰軸を施す。14世紀末から15世紀前半に位置づけられる。

4は縁軸小皿の底部である。底径は6.0cmを測る。内外面に回転撫で調整を行う。底部には回転糸切り痕が見られる。14世紀末から15世紀前半に位置づけられる。

5は御皿の底部である。底径は10.0cmを測る。見込付近まで灰軸が施される。見込中央の御目がすり減っている。底部外面には回転糸切り痕が見られる。14世紀末から15世紀前半に位置づけられる。

6は御皿である。口径は16.0cmを測る。体部は直線的に開く。口縁端部を内側に折り返し、小突起を形成する。内外面に撫で調整を行う。口縁部周辺に灰軸を施す。14世紀末から15世紀前半に位置づけられる。

7は底部である。底径は4.2cmを測る。内面見込に撫で調整を行い、底部外面には回転糸切り痕が見られ、灰軸が僅かに付着している。香炉の底部という可能性がある。15世紀代に位置づけられる。

<大窯期>

8は丸皿である。口径は10.0cmを測る。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。灰軸を全面に施した後に見込部分を円形に拭っている。底部外面は無軸である。付高台であるが、高台部は欠損している。高台内面には輪トチの跡が見られる。16世紀後半に位置づけられる。

碗 (9・10)

<宮窯期>

9は天目茶碗の体部である。高台脇を平端に仕上げ、体部は直線的に開く。内外面に鉄軸を施すが、高台周辺は露胎である。所産時期は15世紀後半と考えられる。

<大窯期>

10は大窯期の天目茶碗の高台部である。高台径は4.6cmを測る。高台内外面ともに錆軸を、見込部は黒褐色の鉄軸を施す。16世紀前半に位置づけられる。

盤類 (11~13)

<宮窯期>

11は盤類の底部である。底径は15.0cmを測る。色調は灰色を呈する。体部外面下半は回転ヘラ削り調整を行う。内面の見込付近まで灰軸を施す。15世紀代に位置づけられる。

12は盤類の体部である。体部外面下半には回転ヘラ削りを行う。内面と体部中位に灰軸を施す。15世紀代に位置づけられる。

13は盤類の体部である。内外面とともに灰軸を施す。15世紀代に位置づけられる。

④ 中国製磁器 (第14図)

中国製磁器は青磁、白磁、青花の碗・皿が出土したが、全て包含層からである。遺物の年代

観として、青磁は上田秀夫氏、白磁は森田勉氏の編年に依拠した。所産時期は13世紀代から17世紀中頃まで確認出来た。

青磁（1～6）

青磁の分類名は便宜上、国立歴史民俗博物館集成（国立歴史民俗博物館1993）の分類に従った。

1は碗である。外面に鎬連弁文をもつ龍泉窯系碗B1類にあたり、釉調はくすんだ淡緑色を呈し、胎土は密である。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

2は碗である。外面に鎬連弁文をもつ龍泉窯系B1類にあたり、釉調はくすんだ淡緑色を呈し、胎土は密である。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

3は碗である。外面に鎬連弁文をもつ龍泉窯系B1類にあたり、釉調はくすんだ淡緑色を呈し、胎土は密である。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

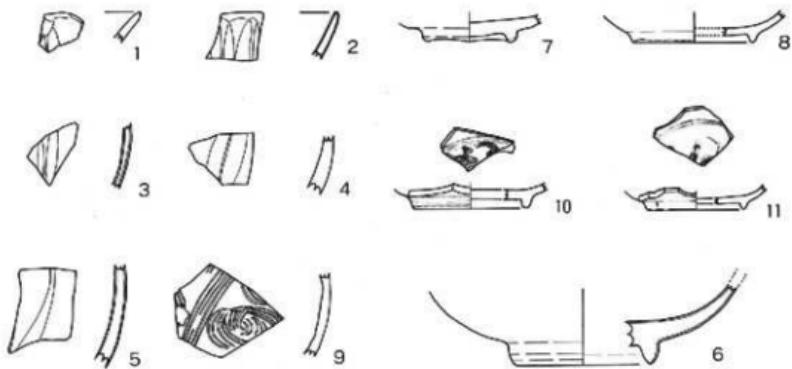
4は碗である。外面に鎬連弁文をもつ龍泉窯系B1類にあたり、釉調はくすんだ淡緑色を呈し、胎土は密である。13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

5は碗である。外面に鎬連弁文をもつ龍泉窯系B1類にあたり、釉調はくすんだ淡緑色を呈し、胎土は密である。14世紀代に位置づけられる。

6は龍泉窯系碗E類にあたり、高台径約7.0cmを測る。くすんだ淡緑色釉が高台内部を除いて施される。胎土は密であり、15世紀代に位置づけられる。

白磁（7・8）

7は皿である。高台径約4.8cmを測る。弧状の抉り込みの入った削り出し高台をもつ。体部下半と高台周辺は露胎であり、回転ヘラ削り調整の後撫で調整が施されている。釉調は乳白色を呈し、胎土はやや粗である。15世紀代に位置づけられる。



第14図 青磁・白磁・青白磁・青花(1/3)

1～6 青磁碗、7・8 白磁皿、9 青白磁瓶、10・11 青花皿

8は皿である。高台径約6.4cmを測る。細かな砂粒が付着する断面逆三角形の高台を持ち、晉付部分を除き白色の釉が施される。16世紀代に位置づけられる。

青白磁（9）

9は梅瓶の体部破片である。外面に沈線で唐草文様が展開されており、内面は回転撫で調整が施され、一部釉が付着する。13世紀代のものである。

青花（10・11）

10は皿である。高台径約6.0cmを測る。高台最付部分は釉剥ぎされており、内底面に染付文様が施される。17世紀中頃に位置づけられる。

11は皿である。高台径約6.0cmを測る。高台内に砂粒が付着し、内底面に染付文様が施される。17世紀中頃に位置づけられる。

（3）近世（江戸時代）以降

① 肥前系陶器（第15～18図）

現在の佐賀県有田町とその周辺の窯で焼成された施釉陶器である、いわゆる唐津やその周囲の施釉陶器も含め、報告する。出土した肥前系陶器は碗、皿、鉢、擂鉢などが見られるが、全て包含層からの出土である。遺物の年代観は大橋康二氏の編年に依拠する。所産時期は16世紀末頃から近現代にわたる。

皿（第15図1～16）

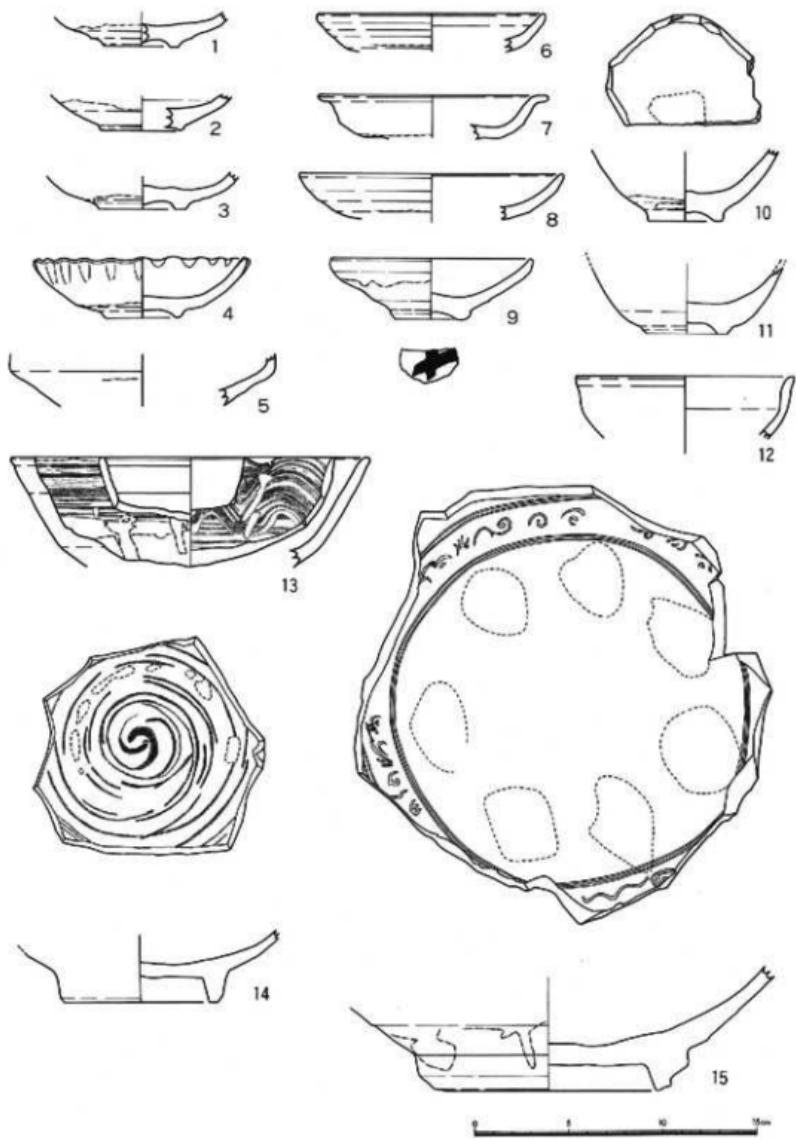
1は唐津の皿で、高台径は4.0cmを測る。やや内湾しながら外方に立ち上がる器形で、削り出し高台を持つ。回転籠削り調整の後、撫で調整を行う。内面全体と体部外面中位までくすんだ灰釉を施す。胎土目痕は見あたらないが、胎土目積期のものと考えられる。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

2は唐津の皿で、高台径は4.0cmを測る。やや内湾しながら外方に立ち上がる器形で、削り出し高台を持つ。回転籠削り調整の後、撫で調整を行う。見込み付近に小さな段を持つ。内面全体と体部外面中位まで灰釉を施す。胎土目痕が1つ見られる。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

3は唐津の皿で、高台径は4.6cmを測る。内湾しながら立ち上がる器形で、削り出し高台を持つ。外面には回転撫で調整を行う。内面全体と体部外面中位にまで白濁した灰釉を施す。内面には繊維（藁か）状のものが付着している。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

4は唐津の皿である。口径11.0～11.4cm、器高3.2cm、高台径4.0cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、波状口縁となる。体部外面下半に撫で調整を行い、削り出し高台を持つ。内面全体と体部外面中位にまで灰釉を施す。釉は貫入が入る。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

5は唐津の皿の体部である。直線的で、中位から上方に直立させる器形である。内面と体部



第15図 肥前系陶器(1/3)
1~9 唐津皿、10~12 瓢、13~15 鉢

外面上方に灰釉を施し、外面に撫で調整を行う。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

6は唐津の皿で、口径は12.0cmを測る。口縁部は内湾しながら外方に開く。内面から体部中位に灰釉を施し、体部下位に撫で調整を行う。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

7は唐津の皿で、口径は12.2cmを測る。体部中位で斜め上方に屈曲させ、口縁端部を真横に引き出す。内面と体部外側中位までくすんだ灰釉を施す。内外面に撫で調整を行う。17世紀前半に位置づけられる。

8は唐津の皿で、口径は13.8cmを測る。体部から口縁部へ内湾しながら外方に開く器形である。内面全体から体部外側中位まで灰色の灰釉を施す。内外面に撫で調整を行う。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

9は唐津の皿である。口径は11.0cm、器高3.2cm、高台径4.8cmを測る。体部はやや直線的に外方に開き、口縁端部を上方に屈曲させている。内面全体と口縁部外側付近に灰釉を施す。内面には胎土目を2個残す。高台内には墨書きをしている。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

碗（第15図10～12）

10は唐津の碗で、高台径は4.0cmを測る。体部は内湾して外方に開く器形である。内面全体と体部外側下位にまで灰釉を施す。たいぶ外側は回転撫で調整を行い、削り出し高台を持つ。内面には砂目積み痕が見られる。17世紀前半に位置づけられる。

11は唐津の碗で、高台径は4.4cmを測る。体部は内湾して外方に開く器形である。内面全体から高台付近まで灰釉を施し、削り出し高台を持つ。17世紀前半に位置づけられる。

12は天日茶碗の口縁部である。口径は11.5cmを測る。体部中位で上方に伸び、端部を外方に折り曲げている。内外面に鉄釉を施す。胎土は暗灰色を呈する。

鉢（第15図13～15）

13の口径は18.6cmを測る。やや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外上方に開く器形である。素地は褐色で、内外面に刷毛目の上から灰釉を施す。内外面に撫で調整を行い、体部外側下位は籠削り調整の後、撫で消している。18世紀代に位置づけられる。

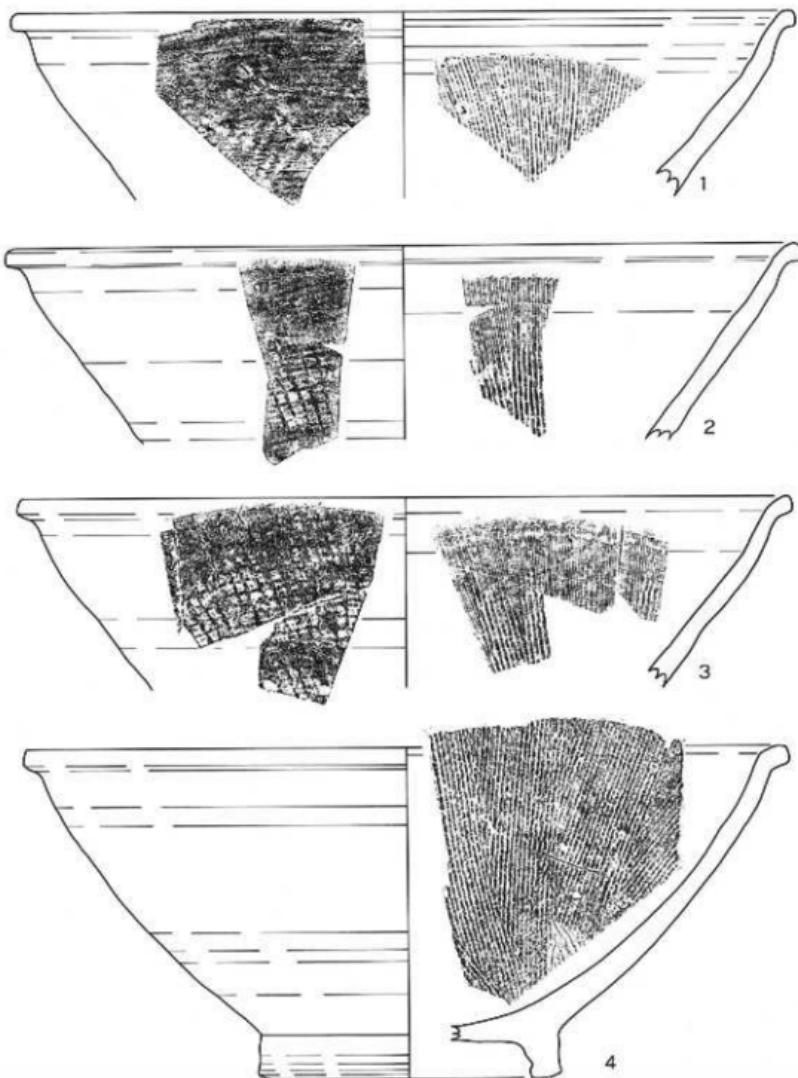
14は鉢の底部である。高台径は8.1cmを測る。内面には刷毛目の上から灰釉を施す。見込には砂が付着している。底部を籠切りし、高台を付ける。体部外側には回転ヘラ削り調整を行う。18世紀代に位置づけられる。

15は鉢の底部である。高台径は12.0cmを測る。外面には鉛釉を施す。内面には幾何文を印刻し、白色の透明釉が掛けられる。陶土塊が七個見られる。

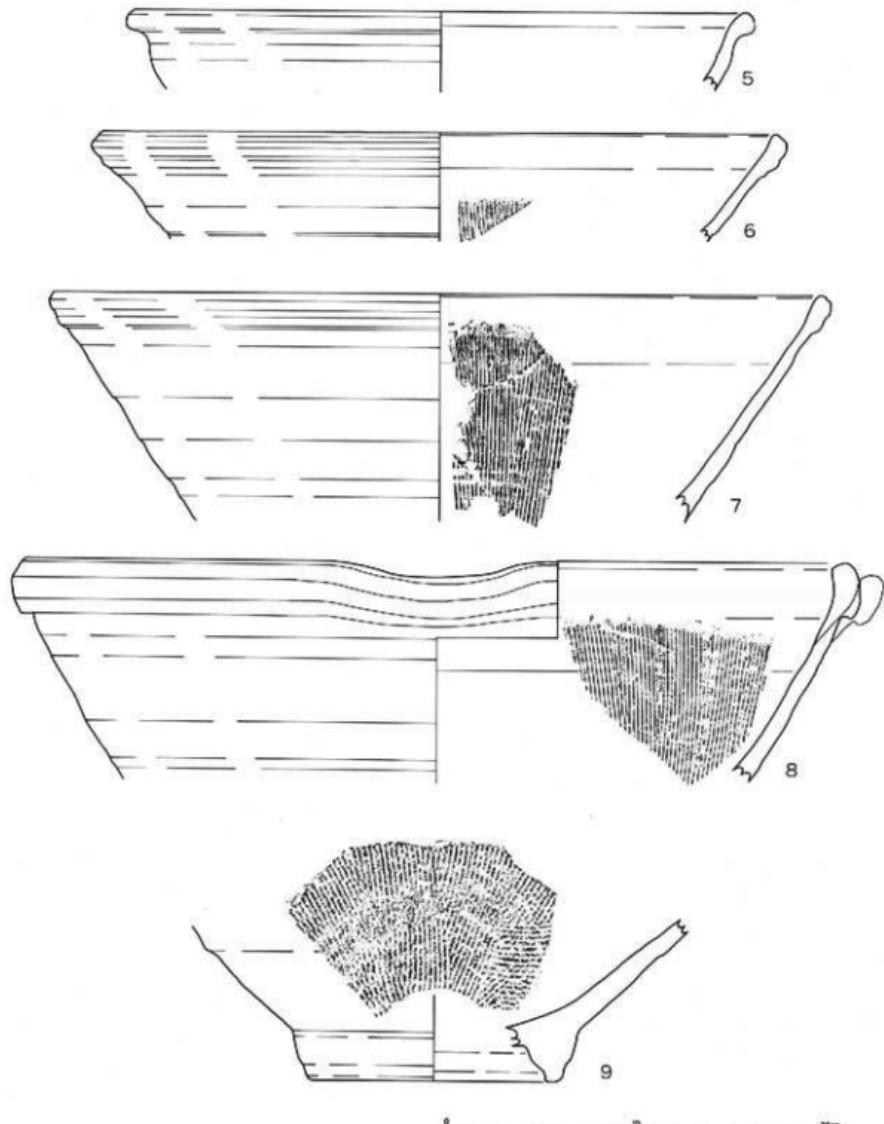
播鉢（第16～18図）

1は口径41.0cmを測る。口縁端部を外側に折り曲げ、端部を嘴状に仕上げる。内面の卸口は密に引き、上端を撫で消している。内外面に鉄釉を施す。卸口は幅2.3cmで11条を数える。卸口同上の間隔は狭い。外面にはくずれた格子状の當て具痕が見られる。

2は口径41.0cmを測る。口縁端部を外側に折り曲げ、横撫で調整により、方頭に仕上げる。



第16図 肥前系陶器擂鉢(1/3)



第17図 肥前系陶器標鉢(1/3)

内外面に撫で調整を行い、鉄釉を施す。体部外面中位には格子状の當て具痕が見られる。卸目の上端を撫で消している。卸目同士の間隔がやや広い。

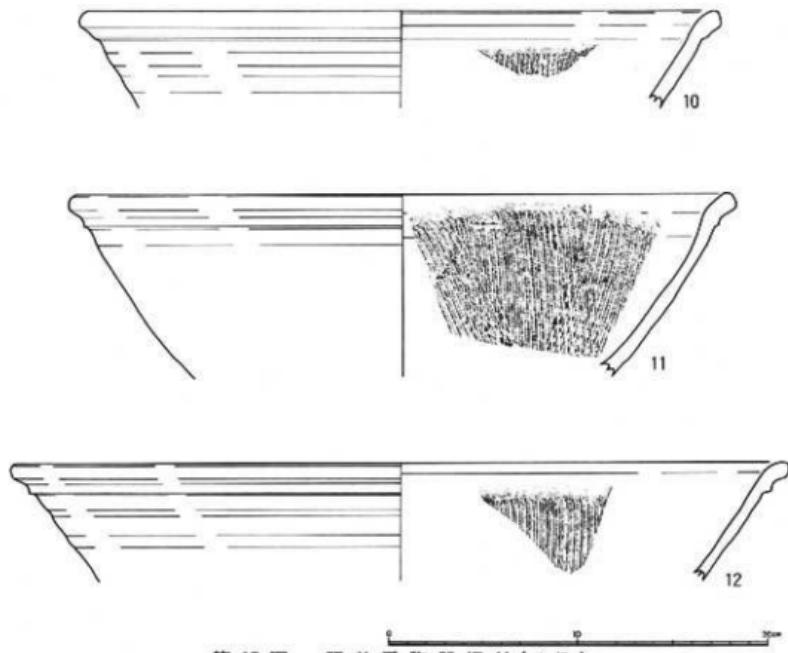
3は口径40.6cmを測る。60と同様の器形である。内面の卸目は密に引き、上端を撫で消している。卸目は幅3.0cmで9条を数える。卸目同士の間隔がやや広い。内外面に鉄釉を施す。外面には格子状の當て具痕が見られる。

4は口径40.0cm、高台径14.6cm、器高17.6cmを測る。60と同様の器形である。内面の卸目は密で、見込中央から放射状に引きあげ、上端を撫で消している。卸目は幅4.9cmで18条を数える。口縁部外面は撫で調整、体部外面下半は回転鎌削り調整を行った後、撫で調整施す。付高台で、端部に砂が付着する。二次被熱をうける。

5は口径32.0cmを測る。60と同様の器形である。内外面に撫で調整を行い、鉄釉を施す。

6は口径35.4cmを測る。丸みを持って、口縁部にいたる器形である。口縁端部を折り返し、外面に突帯状の口縁帯を形成する。口縁端部外面は撫で調整を、口縁部下半は鎌削り調整を行う。卸目の上端を撫で消すが、端部内面にやや卸目の痕跡が見られる。内外面に鉄釉を施す。

7は口径40.0cmを測る。体部は直線的で、外側に開く器形である。口縁端部を折り返し、外面に突帯状の口縁帯を形成する。口縁部外面には撫で調整を、体部下半には鎌削り調整を行う。



第18図 肥前系陶器 撫鉢(1/3)

卸目は密で、上端を撫で消している。内外面に鉄軸を施す。

8は口径43.0cmを測る。体部は内湾し口縁部は垂直に立ち上がる。口縁端部を折り返し、幅2.5cmのU字縁帯を形成する。外面は回転撫で調整を行う。卸目は密で、上端を撫で消している。内外面に鉄軸を施す。片口部外面に自然釉が掛かる。

9は口径は41.0cmを測る。口縁端部を折り返し、外面に弱い突帯状の口縁帯を形成する。卸日の上端を撫で消している。内外面に鉄軸を掛ける。

10は口径34.0cmを測る。口縁端部を折り返し、撫で調整を行う。このため口縁部外面に小突帯が巡る。卸目は幅7.0cmで20条を数える。卸目は密で上部を撫で消す。また個々の卸日の間隔は広めである。内外面に鉄軸を施す。

11は口径41.0cmを測る。61と同様の器形であるが、端部の撫でが強く、外面の突帯は61より、大きい。卸目は密で上部を撫で消す。また個々の卸日の間隔は広めである。内外面に鉄軸を施す。

12は底部である。高台径は12.8cmを測る。内面の卸目は密で、見込中央から放射状に引きあげている。卸目の幅は4.4cmで17条を数える。見込付近は欠損する。底部は削り出し高台で、高台内は撫で調整を行い、段を形成する。体部外面は撫で調整を行い、内外面に鉄軸を施す。

插鉢は口縁部の形態から、3種に分けられる。A類として、折り曲げた口縁部に横撫でを施し、嘴状あるいは方頭にするもの。B類は、口縁部を折り返し口縁帯を作るもの。C類は、折り返した口縁端部に強い横撫でを施し、端部下に突帯が巡るものとに分けた。A類は1から5、B類は6から8、C類は10から12にある。これらは遺構に伴ったものでないため所産時期については今後の資料の増加に期待したい。

② 伊万里（第19・20図）

佐賀県有田町とその周辺の窯で焼成された染付の磁器を一括し、伊万里として報告する。出土した伊万里は皿2と碗9の井戸埋土からの出土を除いて全て包含層からである。年代観は大橋康二氏の編年に依拠した。所産時期は18世紀から近現代にわたる。

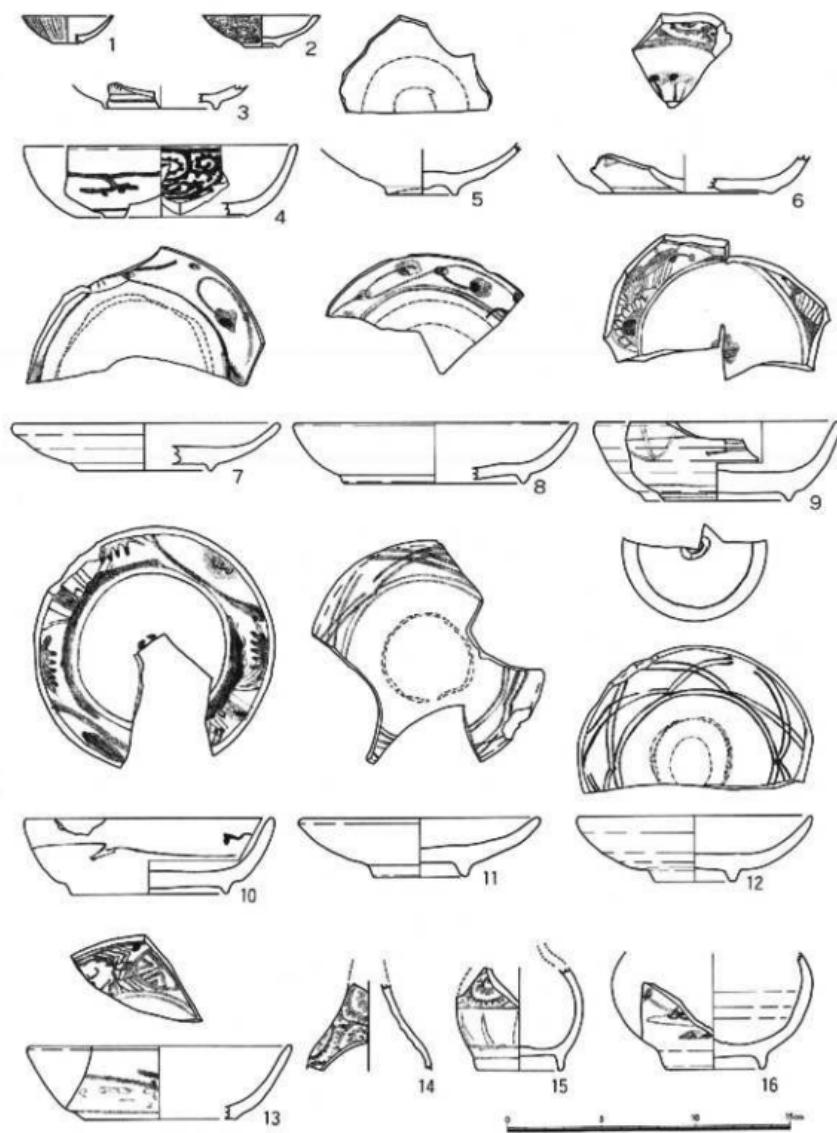
皿（第19図1～13）

1は紅皿である。口径は4.8cm、器高1.4cm、底径1.6cmを測る。型押し成形を行い、外面には菊花を表す。内外面に白磁軸を施す。所産時期は18世紀末から19世紀前半である。

2は紅皿である。口径は6.2cm、器高1.6cm、底径1.8cmを測る。型押し成形を行い、外面には蛸唐草紋を表す。内外面に白磁軸を施す。井戸SE01埋土から出土した。所産時期は18世紀末から19世紀前半である。

3は皿の底部である。高台径は6.0cmを測る。外面と高台内に染付を施す。高台内に砂が付着する。

4は口径14.4cm、器高3.8cm、高台径9.0cmを測る。体部から口縁部にかけて内湾しながら外上方に開く器形である。内面には蛸唐草文を、外面には唐草文を描く。底部は蛇の目凹型高台



第19図 伊万里(1/3)

1・2 紅皿、3~13 皿、14~15 瓶、16 壺
伊万里碗出土分布 中世土師器皿出土分布

を持つものであろう。18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。

5は皿の底部である。高台径は3.8cmを測る。内面は蛇の目軸剥ぎを行う。外面の軸は高台疊付近くまで掛かる。高台内に砂が付着する。18世紀代に位置づけられる。

6は皿の底部である。高台径は9.0cmを測る。見込には花文、口縁部内面には蛸唐草文を施す。底部は蛇の目凹型高台を持つ。18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。

7は口径13.8cm、器高2.5cm、高台径7.0cmを測る。ゆるく内湾して、外上方に開く器形である。底部は削り込み高台ある。

内外面に軸を施すが、内底面見込みを蛇の目軸剥ぎを行う。内面は唐草文が施され、外面は無文である。18世紀代に位置づけられる。

8は口径14.6cm、器高3.2cm、高台径9.4cmを測る。ゆるく内湾して、外上方に開く器形である。底部は削り出し高台である。内面見込みに蛇の目軸剥ぎを行う。内面は唐草文が施され、外面は無文である。18世紀代に位置づけられる。

9は口径12.0cm、器高4.2cm、高台径7.6cmを測る。内面には草花文、外面には唐草文を描く。内底面中央にコンニャク印判による五弁花を、高台内に漏斗字を施す。口縁部から体部中位まで白濁した焼き継ぎ痕を残す。18世紀後半に位置づけられる。

10は口径13.0cm、器高4.0cm、高台径8.0cmを測る。内湾しながら外上方に立ち上がる器形である。内面には草花文、外面にはくずれた唐草文を描く。見込み中央にコンニャク印判の五弁花を施す。18世紀後半に位置づけられる。

11と12はそれぞれ、口径12.6cm、12.2cm、器高3.1cm、3.5cm、高台径4.8cm、4.2cmを測る。体部はゆるく内湾し外上方に開く器形である。体部内面は二重格子文、外面は無文である。見込み付近は蛇の目軸剥ぎを行い、砂が環状に付着する。18世紀代に位置づけられる。

13は口径13.6cm、器高3.9cm、高台径8.0cmを測る。体部・口縁部内面に三方割銀杏文、外面に唐草文を描く。底部は蛇の目凹型高台を持つものであろう。18世紀後半に位置づけられる。

瓶類（第13図14・15）

14は瓶類の頸部である。外面は蛸唐草文を描く。内面は無軸で回転撫で調整の後に上方に撫で調整を施す。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。

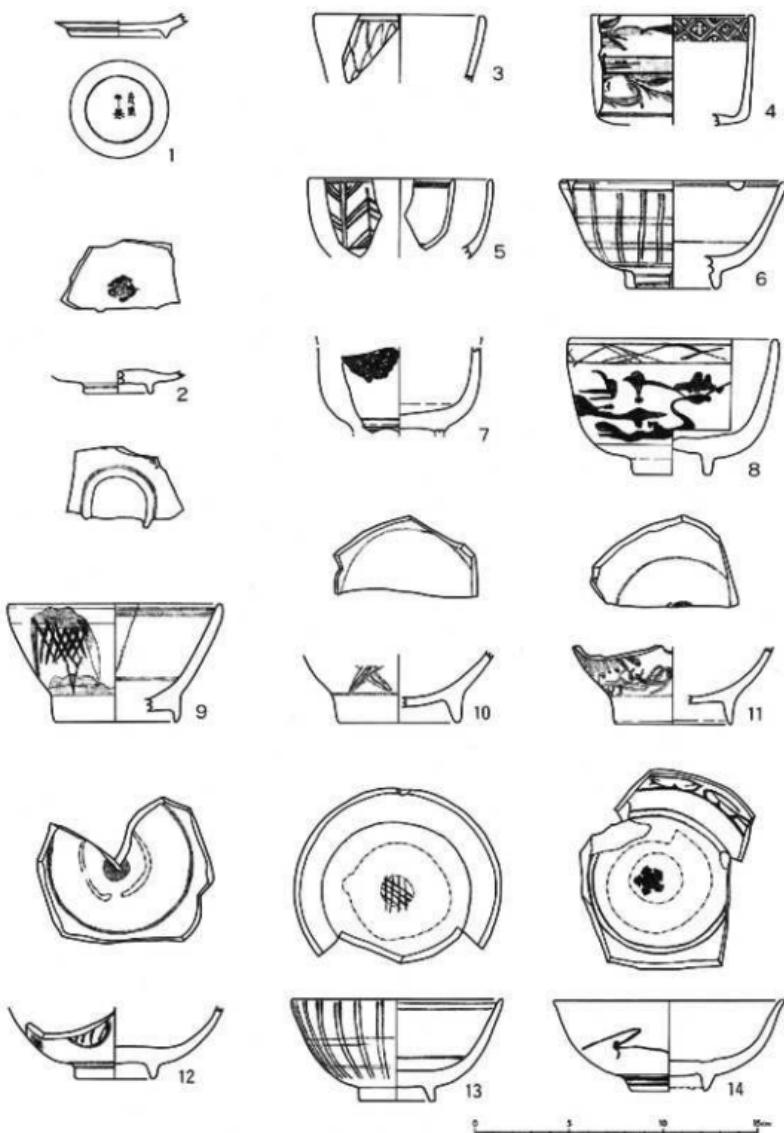
15は瓶類の底部である。底径は4.4cmを測る。体部は強く内湾する。体部外面は蛸唐草文、松葉文を直線で仕切っている。内面は無軸で、回転撫で調整を施す。体部から高台内全面に軸を施す。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。

壺（第13図16）

16は油壺の底部である。底径は5.1cmを測る。体部は強く内湾する。体部外面は草花文を描く。内面は無軸で、回転撫で調整を施す。体部から高台内全面に軸を施す。所産時期は18世紀後半であろう。

碗（第20図）

1は碗の底部である。高台径は5.0cmを測る。内外面に軸を施す。高台内には「太明年製」の



第20図 伊万里碗(1/3)

銘款を描く。18世紀代に位置づけられる。

2は碗の底部である。高台径は3.4cmを測る。筒型碗（湯飲み碗）の器形になると考えられる。見込中央に五弁花文を施す。18世紀後半に位置づけられる。

3は口径8.8cmを測る。外面には1重の網目文様を描く。17世紀後半に位置づけられる。

4は荷葉猪口である。口径は8.4cm、器高5.8cm、底径8.0cmを測る。底部からほぼ垂直に立ち上がる器形である。外面に竹の模様、内面には四方襷文を描く。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。

5は口径9.6cmを測る。外面に矢羽根を描く。18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。

6は口径11.7cm、器高5.7cm、底径4.6cmを測る。外面に二重格子文を描く。18世紀代に位置づけられる。

7は陶胎染付の碗である。内湾しながら直立する器形である。内外面に灰色の透明釉を掛け。外面に团鶴のコンニャク印判を施す。18世紀代に位置づけられる。

8は陶胎染付の碗である。口径10.7cm、器高7.2cm、高台径4.0cmを測る。体部が内湾し、口縁部を直立させる器形である。口縁部外面に斜格子を、体部外面に草花文を描く。灰色の透明釉を全面に掛ける。18世紀代に位置づけられる。

9は広東碗である。口径11.2cm、器高6.2cm、底径6.3cmを測る。高台の器壁は薄い。外面に草花文を描く。口縁部から高台付近にまで焼難痕を残す。井戸SE01の埋土から出土した。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。

10は広東碗の底部である。高台径は6.2cmを測る。高台の器壁は99に比べて厚い作りである。外面には草花文（？）と内面に文様を描く。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。

11は広東碗の底部である。高台径は6.2cmを測る。体部外面に菊花文と草花文を、見込には崩れた文花を描く。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。

12は碗の底部である。高台径は4.0cmを測る。体部は内湾する器形である。内面見込と、体部外面に丸文を描く。内面を蛇の目釉剥ぎにし、砂が環状に付着する。18世紀後半に位置づけられる。

13は口径11.0cm、器高5.4cm、高台径4.0cmを測る。内面は蛇の目釉剥ぎをし、見込に斜格子文を描く。外面は二重格子文を描く。18世紀代に位置づけられる。

14は口径12.2cm、器高4.8cm、高台径3.8cmを測る。内面は蛇の目釉剥ぎをし、見込にコンニャク印判で五弁花文を描く。口縁部内面に草花文（？）を外面に唐草文を描く。18世紀後半に位置づけられる。

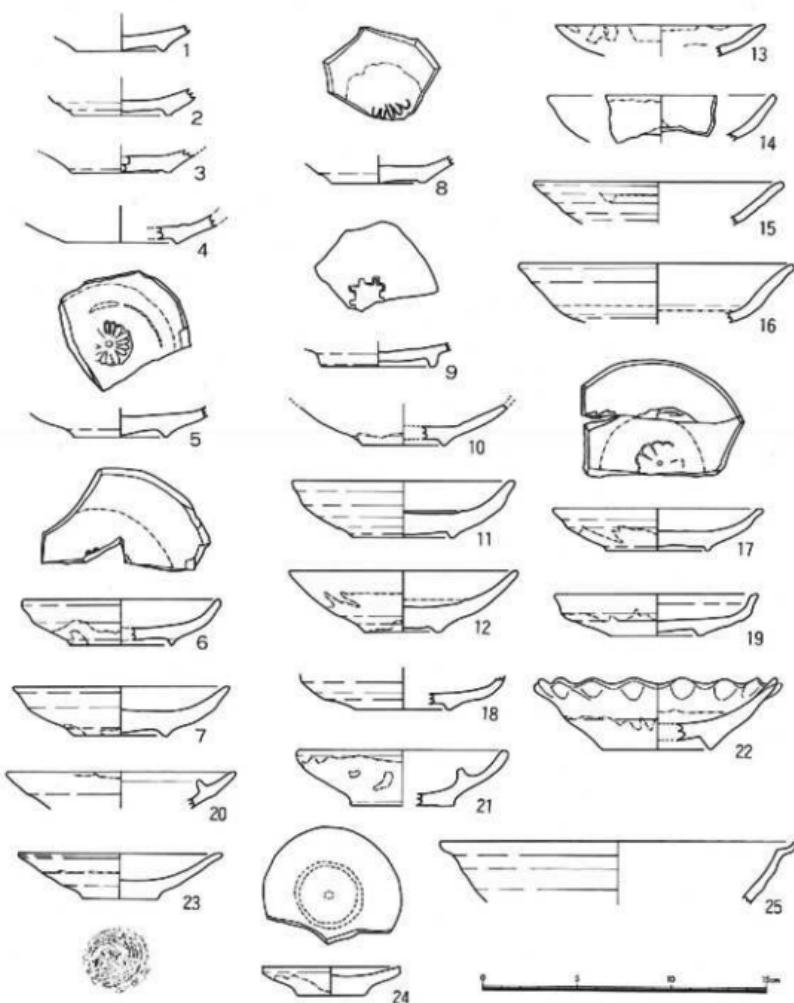
③ 越中瀬戸（第21・22図）

越中瀬戸は窯の操業時期から大窯期と、登窯期と区分されている。大窯期は16世紀末から17世紀中頃まで、登窯期は17・18世紀頃とされている。しかし、窯の発掘調査が皆無に等しいこともあり、時期判別の出来る資料は僅かであった。ほとんどが包含層の出土であったが、丸碗

が井戸埋土及び土坑から出土した。ただ、年代の確実な共伴遺物が無いことから時期の比定は出来なかった。年代観については宮田進一氏の編年案を参考とした。所産時期は17世紀前半から19世紀代まで確認出来た。

皿（第21図1～25）

1は内堀げ皿の底部である。高台径は4.8cmを測る。体部下半を箆削り調整した後に撫で調



第21図 越中瀬戸皿(1/3)

整を行う。底部は削り出し高台である。内面内禿げで、内底面には軸止めの段を持つ。見込み付近まで鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

2は内禿げ皿の底部である。高台径は5.2cmを測る。内外面撫で調整を行う。底部は削り出し高台である。見込み付近まで灰軸を施すが、2次被熱を受ける。18世紀代に位置づけられる。

3は内禿げ皿の底部である。高台径は5.0cmを測る。内外面撫で調整を行う。削り出し高台である。見込み付近から体部外面中位まで鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

4は内禿げ皿の底部である。高台径は4.8cmを測る。体部下半を回転撫で調整した後に撫で調整を行う。底部は削り込み高台である。見込み付近にまで鉄軸を施す。内底面には撫で調整の後に磨きを施す。18世紀代に位置づけられる。

5は内禿げ皿の底部である。高台径は4.3cmを測る。内外面とも回転撫で調整を行う。内底面には十六介菊の印花を施す。内面には重ね焼きの跡を残す。底部は削り出し高台である。見込み付近と体部外面中位に鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

6は内禿げの丸皿である。口径は10.2cm、器高2.4cm、高台径5.4cmを測る。底部は削り出し高台である。やや内湾氣味に立ち上がり、外方に開く器形である。見込み付近と体部外面中位まで鉄軸を施す。見込中央に印花文を施す。17世紀前半に位置づけられる。

7は内禿げの丸皿である。口径は11.2cm、器高2.6cm、高台径は5.0cmを測る。やや内湾氣味に立ち上がり、外方に開く器形である。底部は削り出し高台である。体部外面下半の籠削り調整の後に内外面撫で調整を行う。見込み付近から高台付近まで鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

8は内禿げ皿の底部である。高台径は5.0cmを測る。削り出し高台で、高台内の削りは浅い。内外面とも回転撫で調整を行い、鉄軸を施す。内底面中央に印花を押捺している。17世紀前半に位置づけられる。

9は丸皿の底部である。高台径は6.0cmを測る。体部下半には撫で調整を行う。内面全体に灰軸を施す。内面見込みには「井」字の印花を施す。底部は削り出し高台である。17世紀前半に位置づけられる。

10は内禿げ皿の底部である。高台径は4.4cmを測る。内面見込みを強く撫で、段を持つ。見込み付近から体部外面下半まで鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

11は内禿げの丸皿である。口径は11.6cm、器高3.0cm、高台径5.2cmを測る。外面は籠削りした後に撫で調整を行う。底部は削り出し高台である。内底面には軸止めの段をつくる。内外面に鉄軸を施すと考えられるが、焼成不良で生焼である。17世紀前半に位置づけられる。

12は内禿げの丸皿である。口径は12.0cm、器高3.2cm、高台径4.0cmを測る。底部は削り出し高台である。体部外面下半は回転籠削り調整を行った後に撫で調整を施す。内面見込み付近と体部外面中位まで鉄軸を施す。内底面には軸止めの段を持つ。17世紀前半に位置づけられる。

13は丸皿で、口径11.0cmを測る。直線的に外上方に伸びる。内外面には回転撫で調整を行い、口縁部付近に灰軸を施す。18世紀代に位置づけられる。

14は丸皿で、口径12.0cmを測る。口縁部に横撫でを施し、外反させている。灰釉と鉄釉の掛け分けを行う。17世紀前半に位置づけられる。

15は丸皿で、口径13.0cmを測る。体部から直線的に伸び、端部を面取りしている。内外面に回転撫で調整を行う。内面全体と口縁端部外面には鉄釉を施す。

16は内禿げの丸皿である。口径は14.6cmを測る。内外面に回転撫で調整を行う。内面見込み付近と体部外面中位まで灰釉を施す。17世紀前半に位置づけられる。

17は丸皿である。口径は11.0cm、器高2.2cm、高台径5.4cmを測る。体部外面下半は籠削り調整の後に回転撫で調整を行う。底部は削り出し高台である。内底面には印花を捺印する。内面全体と体部外面中位に灰釉を施すが、二次比熱を受けている。17世紀前半に位置づけられる。

18は皿の底部である。高台径は5.0cmを測る。体部下半を籠削り調整した後に撫で調整を行う。底部は削り込み高台である。見込み付近から体部外面下半に鉄釉を施す。口縁部が屈曲し直立する向付の形態をとるものであろう。17世紀前半に位置づけられる。

19は口径10.6cm、器高2.2cm、高台径4.8cmを測る。内湾気味に伸び、体部中位で屈曲し直立する向付である。体部外面は回転籠削りの後、撫で調整を施す。底部は削り込み高台である。内面は見込み付近に外面は体部中位まで鉄釉を施す。17世紀前半に位置づけられる。

20は灯明受皿である。口径は12.0cmを測る。体部内面には凸帯を巡らした仕切りを持つ。口縁部外面には回転撫で調整を行う。内面全体と口縁端部外面に灰釉を施す。井戸SE01の埋土から出土した。18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

21は灯明受け皿である。口径は11.0cm、器高2.9cm、高台径5.4cmを測る。体部内面には凸帯を巡らす。体部は直線的で口縁部で内湾しながら立ち上がる。体部外面下半は回転籠削りの後、撫で調整を行う。底部は糸切り後撫で消している。内面全体と口縁端部外面に鉄釉を施す。18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

22は口縁端部を指で押さえ、波状口縁に仕上げる輪花皿である。口径は12.3cm、器高3.5cm、高台径5.8cmである。削り出し高台で、高台内への削りが深い。内外面ともに撫で調整を施す。体部外面下半は回転籠削りの後、撫で調整を行う。見込み付近から体部外面中位に鉄釉を施す。17世紀前半に位置づけられる。

23の口径は10.6cm、器高2.4cm、底径3.8cmを測る。体部は直線的で口縁端部を僅かに外反させる。内外面に撫で調整を行う。内面全体と口縁部外面に鉄釉を施す。底部に回転糸切り痕が見られる。18世紀代に位置づけられる。

24の口径は7.2cm、器高1.5cm、底径3.5cmを測る。内外面に鉄釉と回転撫でを施す。底部は糸切り痕が見られ、無釉である。ものを入れるというよりは、乗せる台（茶托か）として使用したものであろう。18世紀代に位置づけられる。

25は折縁皿である。口径は18.7cmを測る。端部を外方に引き出し上方につまみあげている。内外面に灰釉を施す。17世紀前半に位置づけられる。

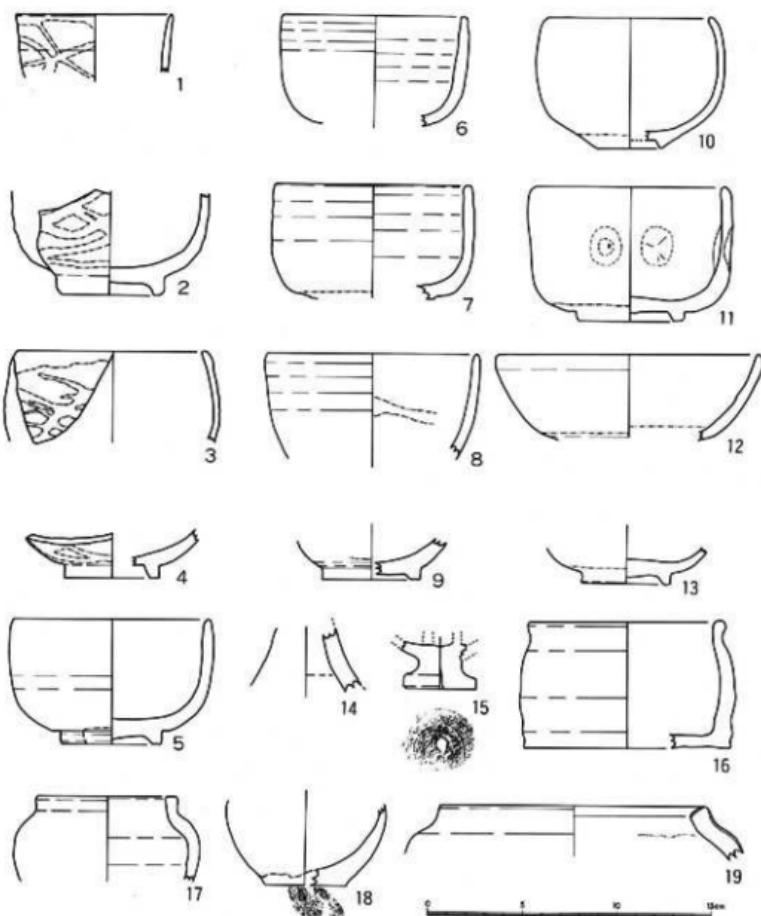
碗（第22図1～13）

1は丸碗である。口径8.0cmを測る。外面に撫で調整を行う。緑色釉を内面全体に、外面には網状に施す。19世紀代に位置づけられる。

2は鉢の底部である。底径は5.1cmを測る。体部上半は回転撫で調整、下半は回転篦削り調整を行う。緑色釉を内面全体と、外面には網状に施す。底部は削り出し輪高台で、撫でにより仕上げる。高台端部外側に面取りをする。19世紀代に位置づけられる。

3は丸碗である。口径は10.0cmを測る。内外面回転撫で調整を行う。内面全体と、口縁端部外面及び、体部外面には網状に鐵釉を施す。19世紀代に位置づけられる。

4は鉢の底部である。高台径は5.0cmを測る。体部下半は回転篦削り調整の後撫で調整を行う。



第22図 越中瀬戸(1/3) 1~13 碗、14 瓶、15 乘燭、16~19 壺

底部は付高台である。内面全体と、体部下半は網状に鉄軸を施す。井戸SE01の埋土から出土した。19世紀代に位置づけられる。

5は丸碗である。口径10.3cm、器高6.6cm、高台径5.2cmを測る。体部は内湾し、口縁部を直立させる器形である。体部外面下半は回転鎔削り調整を行い、高台脇を水平に削り出す。内面全体と高台付まで鉄軸を掛ける。

6は丸碗である。口径9.5cmを測る。体部は内湾し口縁部を直立させる器形である。内外面に撫で調整及び鉄軸を施す。

7は丸碗である。口径は10.0cmを測る。内外面に回転撫で調整を行う。内面全体と体部下半まで鉄軸を施す。土坑SK01からの出土である。

8は丸碗である。口径11.0cmを測る。口縁部が直立器形である。内外面に暗茶褐色の鉄軸を施す。内面中位には黒色の鉄軸を帯状に掛ける。17世紀代に位置づけられる。

9は碗の底部である。高台径は5.2cmを測る。体部下半から底部の削り出し高台外面まで回転鎔削り調整を行う。内面全体から体部下半まで鉄軸を施す。17世紀代に位置づけられる。

10は丸碗である。口径8.8cm、器高6.9cm、高台径3.5cmを測る。体部から口縁部へは内湾しながら立ち上がる器形である。体部外面下半は鎔削り調整の後に撫で調整を行う。底部は削り込み高台である。内面全体から体部外面下半に鉄軸を施す。

11は丸碗である。口径10.0cm、高台径、器高7.1cm、高台径5.5cmを測る。体部は内湾し、口縁部を直立させる器形である。体部外面下半は鎔削り調整の後、撫で調整を行う。底部は削り出し高台である。内面全体と高台付近にまで鉄軸を施す。体部中位を指で4カ所凹ませている。井戸SE01の埋土から出土した。18世紀代に位置づけられる。

12は口径14.0cmを測る。内湾しながら立ち上がる器形である。見込付近と体部外面下半まで灰軸を施す。18世紀代に位置づけられる。

13は碗の底部である。高台径は4.6cmを測る。体部外面下半は回転鎔削り調整を行う。底部は削り出し高台である。内面全体と体部下半に灰軸を施す。18世紀代に位置づけられる。

瓶（第22図14）

14は徳利の頸部である。外面には4条の沈線が巡る。内外面に鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

灯明具（第22図15）

15は秉燭である。底径は3.8cmを測る。内外面に鉄軸を施し、脚部は無軸である。底部は回転糸切り痕未調整で、中央には直径5ミリ程の穴を穿つ。燈心立ては欠損している。18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

壺（第22図16～19）

16は口径10.2cm、器高6.7cm、底径11.0cmを測る。体部は直立し、口縁部は若干くびれる。内外面に撫で調整、及び鉄軸を施す。口縁部付近には自然軸が掛かる。底部には回転糸切り痕が見られる。

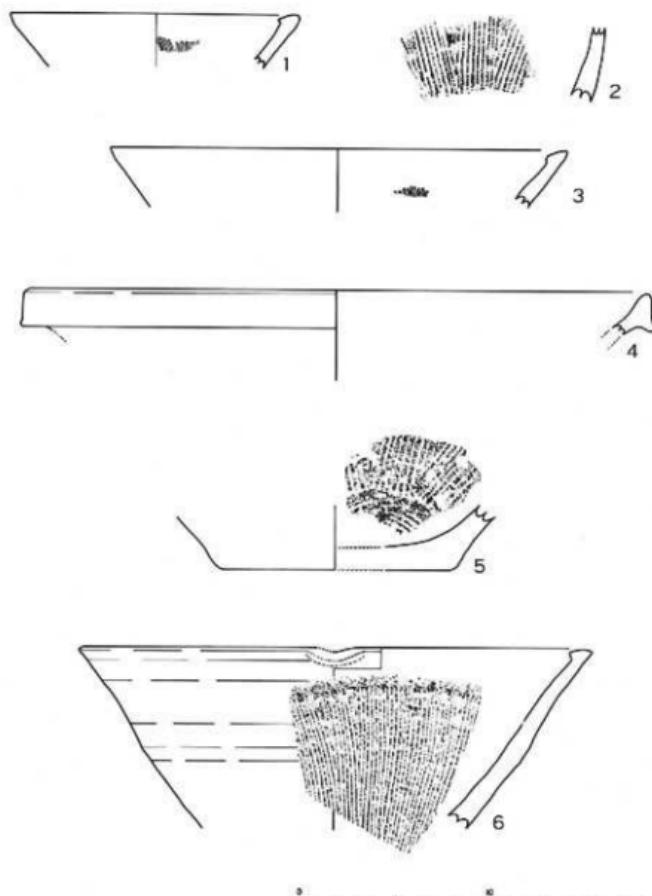
17は口径7.2cmを測る。体部は丸みを持ち、口縁部を直立させる。内外面に鉄軸を施す。

18は壺の底部である。底径は4.2cmを測る。体部は内湾する器形である。内面全体と底部付近にまで鉄軸を掛ける。底部は無釉で回転糸切り痕が見られる。

19は口径14.0cmを測る。口縁部はくびれ、頂部は内傾する。内外面に撫で調整を施す。外面全体と内面は端部付近に鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

擂鉢（第23図）

1は口径15.2cmを測る。口縁部を内側に折り返し、端部を尖らせる。内外面に鉄軸を施す。



第23図 越中湖戸擂鉢(1/3)

卸目は6条を数える。

2は体部である。卸目は幅2.0cmで8条を数える。体部外面は範削り調整を施す。内外面に銷軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

3は口径24.0cmを測る。口縁部を内側に折り返し、端部を鋭く尖らせる。内外面に鉄軸を施す。1より端部の内傾度が強い。

4は口径32.6cmを測る。口縁部を外側に折り返し、縁帶を垂下させる。内外面に銷軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

5は底部である。底径は12.0cmを測る。卸目は幅2.9cmで8条を数える。内底面の卸目は左回りの放射状に見込には環状に施す。内外面に銷軸を施す底部には糸切り痕が見られる。17世紀前半に位置づけられる。

6は口径27.0cmを測る。口縁部を内側に折り返す。卸目は左回りに密に施し、幅1.2cmで、6条を数える。口縁部外面は撫で調整、体部外面下半は回転鎌削り調整を行う。内外面に鉄軸を施す。口縁部付近には自然軸が掛かる。

④ 瓦器（第10図12・13）

黒色に焼成された土器を瓦器とする。出土した瓦器は僅か6点である。全て包含層からで、時期は近世以降としか押さえられなかった。

12は火桶の蓋である。宝珠状のつまみを持つ。全体に焼されて黒色を呈しており、外面は撫で調整が施されている。内面は砂粒が密に付着しているため、ザラついている。つまみ部の直径は4.3cmを測り、かなり大きなものである。

13は火桶である。口径は28.4cmである。外面下方が焼されて黒色を呈しており、内外面とも撫で調整の後磨き調整が施されている。

⑤ 濑戸美濃（第13図14～18）

近世の瀬戸美濃のうち、大窯後半期（17世紀前半）と連房式登窯の施釉陶器である「本業焼」を一括して報告する。

皿（14～17）

14は志野丸皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、端部を僅かに外反させる。内外面に長石軸を施す。所産時期は17世紀前半である。

15、16は志野丸皿である。体部下方は内湾気味に立ち上がり、上方は直線的で端部を丸く收める。所産時期は17世紀前半である。

17は染付皿の底部である。高台径は6.6cmを測る。底部は削り出し高台であるが、高台内に蛇の目型高台をつくる。見込中央には帆掛船を描く。胎上は乳白色を呈し、透明釉を全面に施す。所産時期は19世紀前半である。

碗（18）

18は碗の底部である。高台径は6.0cmを測る。高台の高い広東碗型である。見込中央には五弁花を描く。胎土は乳白色を呈し、内外面に透明釉を施す。所産時期は19世紀前半である。

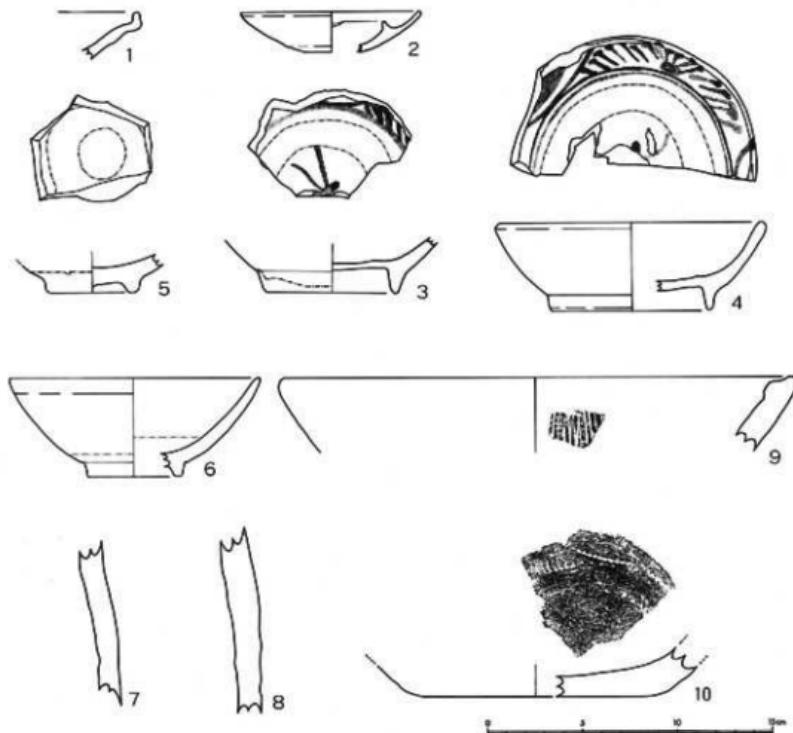
(4) その他の陶器

これまで紹介してきた以外の陶器について一括して報告する。これらは、数量的に少ないものや産地の推測は出来ても、確証のないものを挙げた。

皿(第24図1~4)

1は折縁皿である。体部は直線的で、口縁部を外折し、端部を真上に短く立ち上がる。内外面に回転撫で調整を行い、灰釉を施している。肥前系陶器の可能性がある。

2は信楽の灯明皿である。口径は9.4cm、器高2.1cm、底径3.0cmを測る。内湾気味に外上方に開く器形である。体部内面には凸帯を環状に巡らした仕切りを持つ。口縁部外面は回転撫で調



第24図 その他の陶器(1/3)

1~4 皿(2は信楽)、5・6 瓢、7・8 越前焼、9、10 越前焼擂鉢

整、体部外面下半は回転箝削り調整を行う。内面全体に白色の透明釉を施す。

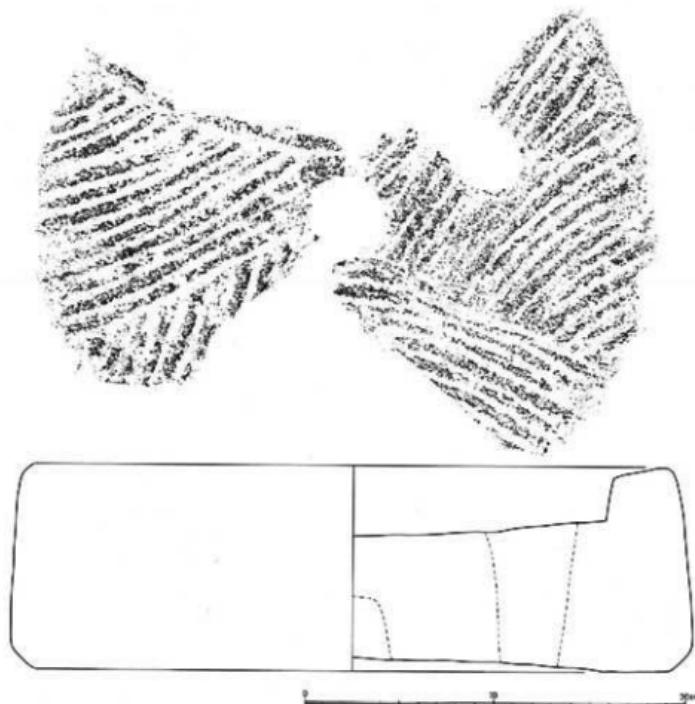
3は皿の底部である。高台径は7.0cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、広東範風の高台を持つ。内面には花文（旭文？）を描く。高台付近を除いて白色釉を施すが、見込み部分は蛇の目釉剥ぎされている。幕末期に魚津で焼成された陶器、大野焼の可能性が高い。

4は口径13.8cm、器高4.5cm、高台径8.2cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、広東範風の高台を持つ。高台付近を除いて白色釉が施されるが、見込み部分は蛇の目釉剥ぎされている。大野焼の可能性が高い。

碗（5・6）

5は碗の底部である。高台径は4.9cmを測る。体部外面下半は回転箝削りの後に、撫で調整を行う。底部は削り出し高台である。高台付近を除いて灰釉が施されるが、見込み部分を蛇の目釉剥ぎしている。京焼系肥前陶器の可能性がある。

6は碗である。口径13.2cm、器高5.2cm、高台径5cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、外上方に聞く器形である。体部外面下半は回転箝削りの後に、撫で調整を行う。底部は断面逆



第25図 石臼

台形の削り出し高台を持つ。高台付近を除いて灰釉を施すが、見込み部分は蛇の目釉剥ぎをしている。京焼系肥前陶器である可能性がある。

甕 (7・8)

7は甕の体部破片である。内面には整形時の指頭圧痕が残る。色調は茶褐色を呈し、胎土は小石を多く含み、密である。所産時期は16世紀代と考えられる。

8は甕の体部破片である。内面に横方向の粗い撫で調整が施され、指頭圧痕が残る。外面にはオリーブ色の自然釉がかかっており、内面の色調は暗灰色を呈する。胎土は小石を含み、密である。所産時期は16世紀代と考えられる。

擂鉢 (9・10)

9は口径27.0cmを測る。口縁端面は内傾して面を取っており、窪みがある。内面に卸目が施されているが、摩滅が激しいため浅い。焼成はあまく、胎土には小石を含み、やや粗い。所産時期は16世紀代である。

10は擂鉢の底部である。底径は6.0cmを測る。内外面とも摩滅が激しく、内面の卸目はほとんど消えている。焼成によって胎土は赤褐色と灰色の二層になっており、小石を多く含み、やや粗い。

B. 石器・石製品

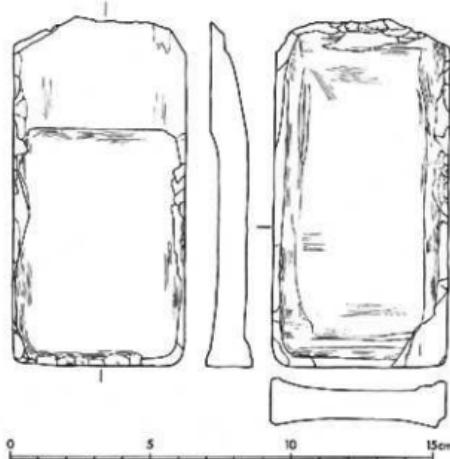
石臼 (第25図)

石臼はSE01埋土出土のものと、調査区北部の包含層出土のものが接合している。SE01からの出土なので、近世のものであろう。

石材は比較的柔らかい凝灰岩を使用し、裏面の目はかなりすり減っている。上面が3cmほど削められていること、芯棒受けの穴が裏面にあることと、供給口が穿たれていますから、上臼であることがわかる。挽き木の取り付け穴は側面に一ヵ所痕跡が確認できる。目の単位は比較的粗く、単位は6単位の区分と推定できる。直径は24.0cm、高さは7.3cmを測る比較的小型品である。

石硯 (第26図)

硬質の粘板岩製の硯がSD03付近の包含層から出土している。周辺の出土遺物か



第26図 石臼

ら判断して、近世のものと推定できる。両面を研磨して鏡として使用している。縁帶は両面ともかなり打ち欠かれている。正面は約3分の2程度が浅く削られており、残存状態は良好である。裏面は縁帶の欠損で海部の上端が欠落している。鏡面は何度も削り直しが認められ、その度に鏡面の長さと幅が狭まっている。利用頻度の激しさと使用期間の長さが伺われる。長さは現存部で12.3cmを測るが、推定では13cmを越えるものと思われる。幅は6.2cm、厚さは鏡尻で1.7cmを測る。

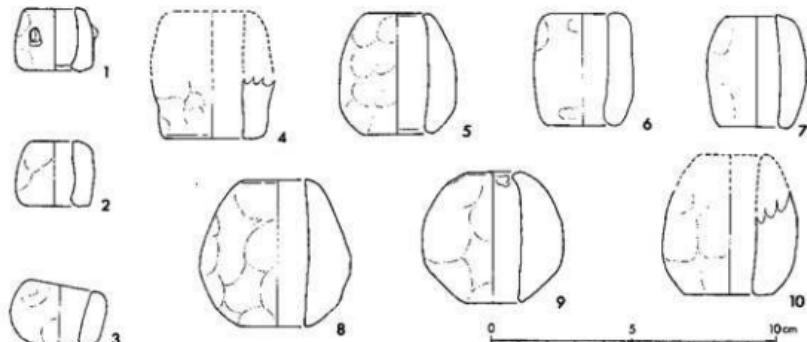
その他の石器

石器としては、鉄石英の残核、碎片、メノウの剥片が1点ずつ出土している。出土場所はいずれも発掘区の西側である。出遺跡からは、弥生時代中期の土器が出土しているので、弥生時代の石器と思われるが、段丘上の佐伯遺跡からは縄文時代前期後葉と中期中葉の遺物が出土しているので、縄文時代の可能性もある。

C. 土 製 品

陶錘（第27図）

陶錘は11点出土しており、いずれも越中瀬戸である。陶錘は大きさにと形状よって3類に分類できる。A類は外径3~3.5cm前後、高さ約2.5cmの小型で（第27図1~3）、4点出土している。形状はややいびつで中央の穴も中心からややすれている。内外面とともに光沢のある暗褐色の鉄釉が施されている。B類は外径約3.5~4.5cm、高さ約4~5cmの円筒形の大型で（第27図4~7、10）5点出土している。施釉は暗褐色、黒褐色の鉄釉が施されているが光沢のあるものは少ない。C類は外径、高さともに5cm前後の球形の大型品で、2点出土している。鉄釉が薄く施されているが、外面はほとんど剥落している。胎上が褐色を呈し、他の2類と焼きが甘くやや軟質である。形態の異なる3種類のそれぞれの年代的関係は不明であるが、越中瀬戸製であることから江戸時代の年代幅の範囲に収まるものと思われる。



第27図 陶錘（越中瀬戸）

陶錘の機能は疑うことなく漁網錐である、と思っている。山遺跡が角川右岸の扇状地上の微高地に立地していることから、当然角川が漁業の対象と考えられる。江戸時代の角川流域の村々では租税の一形である小物成として鮎役、鰯役、鮎川役などが課せられており、毎年一定の漁獲量が確保されていた。遺跡の所在する出村では鮎役4匁、鮎川役4匁(寛文十年)が課せられており、土錘を使用した漁業は鮎と鮎が漁獲対象の一つであった可能性が高い。陶錘における3類型は漁獲対象である魚種との関係が想定でき、出遺跡においては、大型のB、C類が大型の網に、小型のA類が小型の網に付属するものであるとすれば、大型が鮎用、小型が鮎用の網に用いられた可能性が指摘できる。

出遺跡のほかに越中瀬戸の陶錘が出土している遺跡としては、角川流域では佐伯遺跡、早月上野遺跡、鹿熊オヤシキ遺跡、大光寺遺跡があり、佐伯村は鮎川役1匁、早月上野遺跡の位置する吉野村では鮎川役6匁、鰯役2匁、同じく上野村では鮎川役2匁、鹿熊村では鮎川役4匁、大光寺村では鮎川役5匁が課せられている。陶錘出土遺跡がいずれも江戸時代において、漁撈がおこなわれていた村に所在しており、陶錘と川魚の関係がここでも浮かびあがる。

角川流域の村々では、表に示したように、ほとんどの村で小物成として、鮎役、鰯役、鮎川役のいずれかが課せられており、江戸時代の農村において河川の漁業が生業として一定の割合を占めていたことがわかる。

表1. 角川流域における江戸時代小物成(川役)

村名	鮎役(匁)	鰯役(匁)	鮎川役(匁)
住吉		1	3
大光寺			5
出	4		4
佐伯			1
岩高			1
宮津			5
吉野		2	6
上野			2
升田			3
観音堂	4		3
山谷			6
鹿熊			4

D 木製品

出土した木製品は下駄1点と漆碗1点のみである。漆碗はかなり破損しており、図化できたものは下駄のみであった。漆碗は井戸埋土から、下駄は調査区南東端より出土した。時期についてはいずれも近世以降としか言及できない。

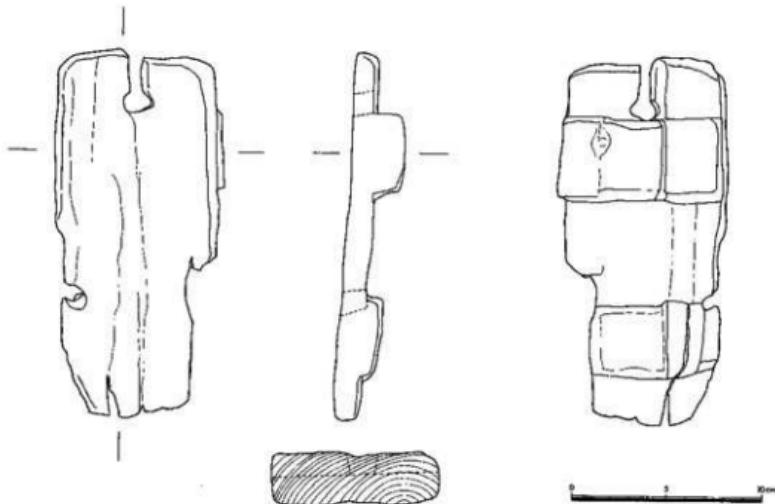
下駄（第25図）

下駄の名称は桜町遺跡報告書の記載*①に依った。出土した下駄は、木質部のみで鼻緒は遺存していない。一本作りの連齒下駄である。台平面形の角を落とした、隅丸長方形を成す。後蓋は後歯より前方に穿たれ、前方や外側に傾斜する。歯は台幅とほとんど変わらないが、両歯とも摩耗が著しい。前蓋の左側と直下に窪みがあり、指のあたりと思われる。前蓋の穿孔は台半軸よりも若干左側に偏ることから右足用に、また大きさから小児用に使用されたと考えられる。板材を加工する際は台表を樹皮側に利用している。単独での出土であるため時期は押さえられないが、古泉氏*②や岩田氏の論稿*③や桜町遺跡出土の下駄とを見る限り、近世的様相を呈しており、それ以降の所産であると考えられる。

*① 小矢都市教育委員会 1982『桜町遺跡（古苗代・鷺場地区）』

*② 古泉 弘 1979『江戸の出土下駄』『物質文化 32』 物質文化研究所

*③ 岩田 隆 1985『中性遺跡出土の下駄』『朝倉氏遺跡資料館紀要』



第28図 下駄

E 金属製品

出土した金属製品は僅かで、古銭とキセル、包丁などで、全て包含層からである。

古銭（第26図1～5）

1は「洪武通寶」（初鋤年1368年）で、X=164、Y=558の地点より出土した。銭文は楷書で、裏面に文字はない。

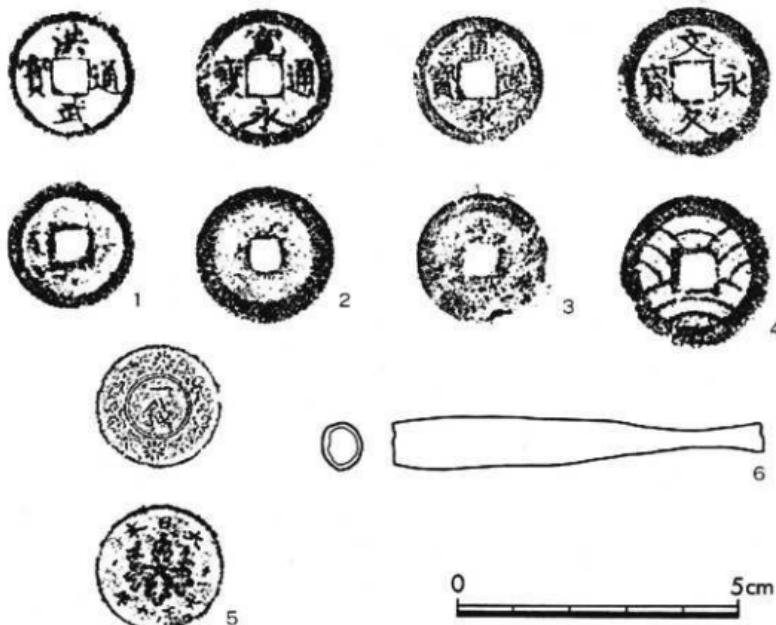
2、3は「寛永通寶」である。2は古寛永で、3は新寛永と見られる。明暦（1655～1658）までを「古寛永」（官銭としては寛永13（1636）年より20年）、寛文以降（1661～1688）を「新寛永」と称する。*ともに裏面に文字はない。2はX=182、Y=551の地点、3は捨土より出土した。

4は「文久永寶」（文久三（1863）年初鋤）である。銭文は楷書で、裏面は青海波の模様がある。X=248、Y=542の地点で出土した。

5は一錢貨幣である。表面に「大日本 大正九年」銘が見える。捨土から見つかった。

キセル（6）

6はキセルの吸口部である。X=271、Y=567の地点で出土した。内部には木質が残る。



第29図 古銭・キセル

F 出土遺物の検討

出土した遺物は弥生時代から近現代にわたる多数の土器、陶磁器、木・石・鉄製品など種類も豊富であった。ただ残念なことに、大半の遺物が包含層からの出土で遺構に伴うものは僅かに土坑出土の越中瀬戸の丸碗、井戸埋土の伊万里碗、皿である。時期を押さえられるのは土器、陶磁器であるが、これは生産地での編年などに依拠せざるを得ないが、ある程度、遺跡の盛衰を伺い知ることが出来るだろう。

弥生時代の中期から後期、古墳時代初頭にかけての土器が確認出来た。当該期の土器は調査区の北西部隅に集中して見られた。この区域は崖下になっており、その上の近隣に佐伯遺跡があり、関連性が伺われる。

古代（奈良・平安時代）の須恵器は8世紀後半から9世紀代まで確認できたが、平安時代後半にあたる資料は見受けられない。出土した遺物の散布状況を示したのが第30図から第33図までであるが、このうち須恵器の分布を示す第30図を見ると、調査区西側中央部と北東部にまとまった散布が見られる。このうち、西側中央部の遺構平面図を第34図に挙げた。掘立柱建物や樹列と思われる柱穴が多数検出されたが、柱穴埋土からは出土遺物が無いため所属時期を確定することが出来ない。ただ、この付近では多数の須恵器以外に他の遺物が見られないことからも同時期の遺構である可能性が高いと言える。建物群は少なくとも、3時期の建て替えがあったと考えられる。調査区北東端は近世以降の小川跡以外検出されなかったが、土地の削平のために確認出来なかつたものと考えられる。

中世（鎌倉・室町時代）の土器・陶磁器は、珠洲をはじめ青磁、白磁、瀬戸美濃など僅かであるが出土しており、それらの年代観に当てはめるならば、13世紀代から16世紀代まで確認できた。第30図は珠洲の分布状況を示しているが、調査区のほぼ全域に出土しているが、北東部、中央部、南西部に固まりが見られる。これは、上卸器皿の分布状況とほぼ一致する。北東部や南西部では土坑や柱穴などの遺構が見られるが、南西部は水はけの悪い湿地帯であり、生活していたとは考えにくく、廐棄の場所としていたのではないだろうか。また室町時代に流通していた貨幣（洪武通寶）も1点はあるが出土しており、中世魚津においての貨幣経済を知る良い資料となる。

近世（江戸時代）以降の陶磁器においては、17世紀から近現代にいたるまで、大量に出土した。第31図～第33図にある遺物の分布状況からは、調査区の北東部に集中しており、主に小川跡及び井戸跡の埋土から多数出土した。ただこれらの埋土からは現代の遺物も見られ、所属時期を確定出来なかった。

伊万里については18世紀代の日常雑器、いわゆる「くらわんか茶碗」や皿がほとんどであった。また皿などの中には、焼締を施したものが数点あり、焼締師の存在を伺わせる。焼締は江戸時代後半に流行したといわれ、当時はまだ焼物が高価であったことを示している。*①初期伊万里は認められなかったが、この時期に近い唐津の胎土皿や越中瀬戸内の内堀皿が一定量見られる。

越中瀬戸に関しては鉄釉の丸碗が特に多く出土し、越中瀬戸の碗のうち9割以上を占めている。

到底茶陶のみに使用したとは考えられず、伊万里碗と同様に、飯茶碗として使っていたものと考えられる。また陶錘も調査区南西部において12個体見られ、本遺跡が漁業に関わっていたことが想定出来る。

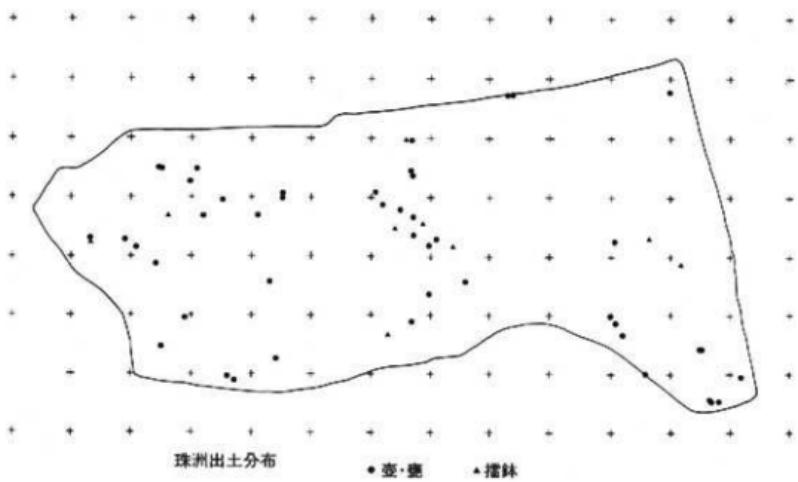
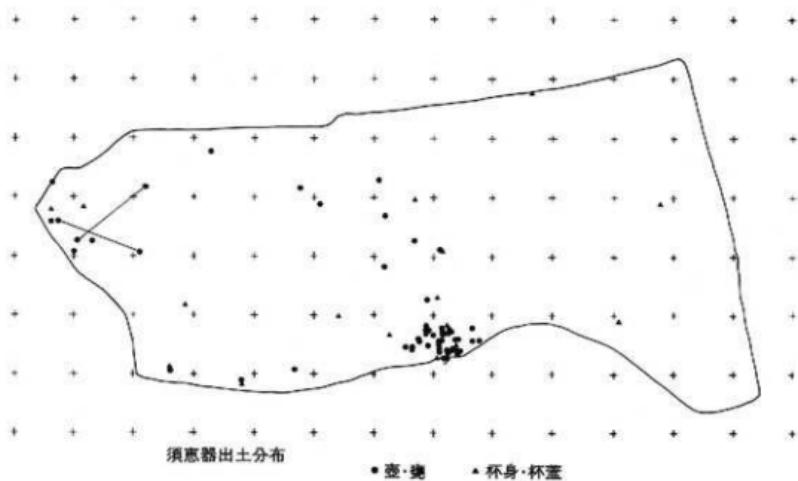
出土遺物は富山県外（珠洲や瀬戸美濃、唐津、伊万里など）や国外（青磁や白磁、青花）から運ばれたもの、県内（須恵器や越中瀬戸など）で制作されたものと多様であり、当時の日本海交易を考えるにあたって貴重な資料と成り得るものである。

*① 西田 宏子・大橋康二他 1988 『別冊太陽 古伊万里』平凡社

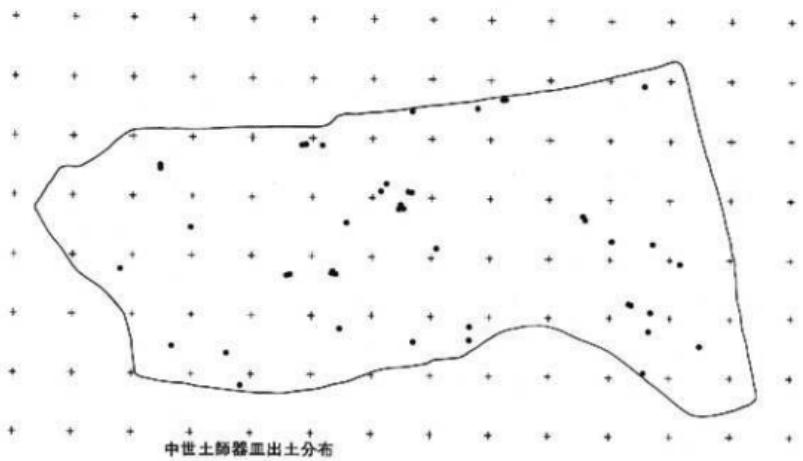
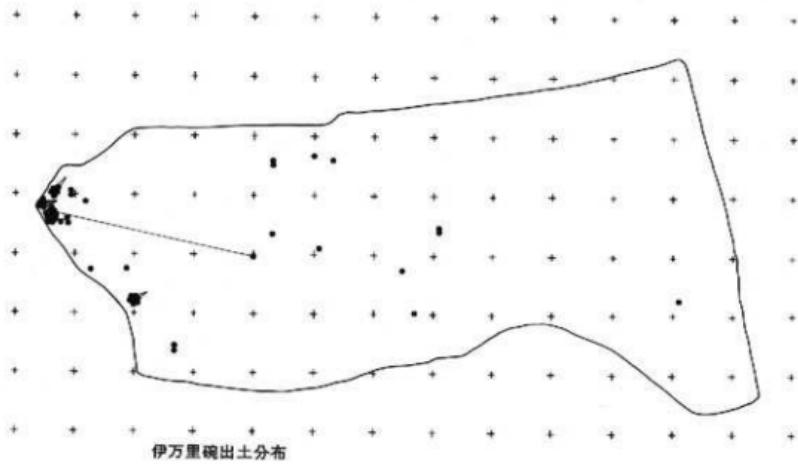
7. 調査のまとめ

前章までに述べてきたことを要約し、調査のまとめとする。

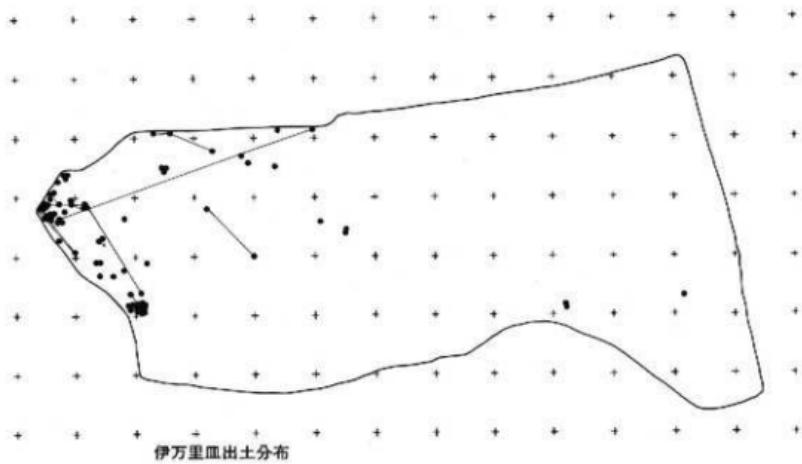
1. 出遺跡は弥生時代中期から近現代にいたる複合遺跡である。
2. 弥生土器は櫛備文系の十器と東北の影響を受けた天王山式土器が見られた。
3. 須恵器は9世紀代のものがほとんどで、平安時代後期の遺物は見つからなかった。
4. 調査区で確認された早月川の洪水跡は奈良・平安時代以降に起こったものである。
5. 古代から近現代にわたる土器・陶磁器は出土量の増減はあるものの、この地域に人々が生活し続けていたことを物語っている。



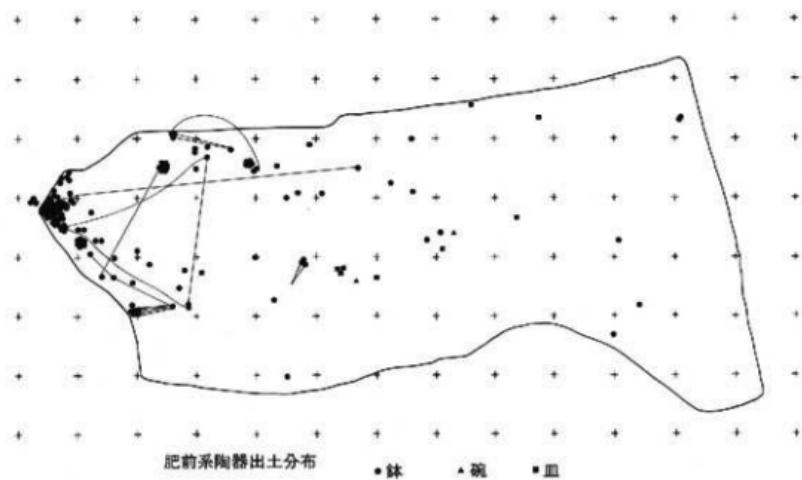
第30図 出土遺物分布(1)



第31図 出土遺物分布(2)



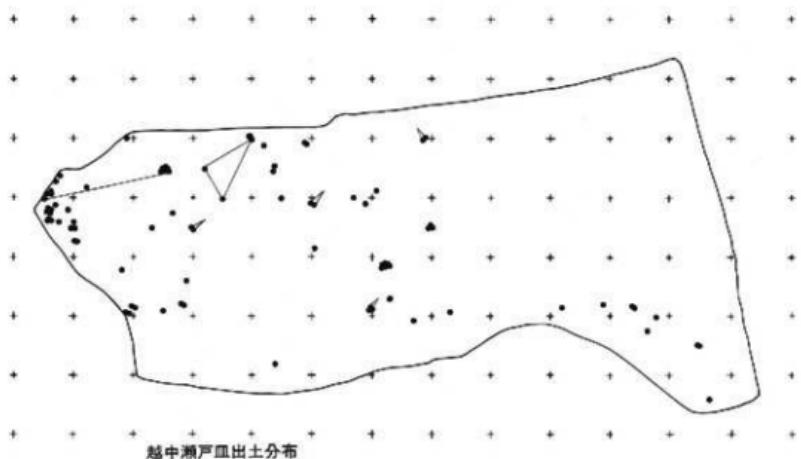
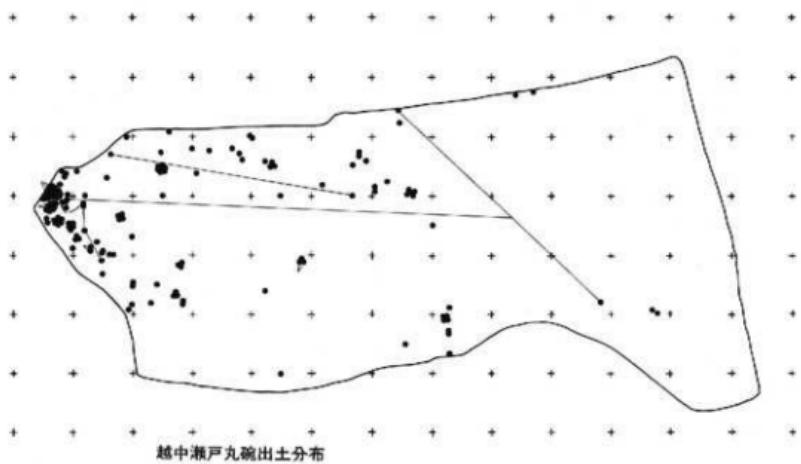
伊万里皿出土分布



肥前系陶器出土分布

●鉢 ▲碗 ■皿

第32図 出土遺物分布(3)



第33図 出土遺物分布(4)



第34図 調査区西側中央部の遺構平面図

種類	器種	釉薬	破片数	個体数(個体識別)
土器(弥生～古代)	壺・甕		79	71
須恵器	壺・甕		69	63
	杯		9	9
	杯蓋		3	3
	杯or杯蓋		9	9
中世土師器	皿		51	47
珠洲	壺・甕		47	44
	擂鉢		12	12
瀬戸美濃(窯窯期)	天目茶碗		4	4
	縁釉皿		1	1
	鉢皿		3	2
	盤類		3	3
	香炉		1	1
瀬戸美濃(大窯期)	天目茶碗		1	1
	丸皿		1	1
青磁	碗		8	8
白磁	皿		2	2
青花	皿		2	2
青白磁	梅瓶		1	1
伊万里	碗		68	43
	皿		111	58
	瓶		1	1
	壺		4	1
	不明		12	2
越中瀬戸	碗		226	164
	鉄釉		217	156
	灰釉		4	4
	緑色釉		5	4
	皿		85	79
	鉄釉		67	61
	灰釉		18	18
	擂鉢		17	17
	壺		37	35
	陶錘		13	12
肥前系陶器	擂鉢		182	97
	碗		2	2
	皿		11	11
	鉢		11	4
瓦器	火桶		5	5

*近現代烟磁品は除く。

出土土器・陶磁器数量表

区段番号	器号	種類	器種	釉薬	年代	口径	器高	底径	高台径
第8回	1	弥生土器	盃		中期	16.2			
第8回	2	弥生土器	甕		中期	22.6			
第8回	3	弥生土器	罐		弥生後期～古墳初期				
第8回	4	須恵器	杯益						
第8回	5	須恵器	杯蓋		9C	11.7			
第8回	6	須恵器	杯益		9C	13			
第8回	7	須恵器	杯						4.8
第8回	8	須恵器	杯						7.6
第8回	9	須恵器	杯		9C			8.4	
第8回	10	須恵器	盃		8C後半				11
第8回	11	須恵器	盃		9C				
第8回	12	須恵器	甕		9C(上末)	20.2			
第9回	13	須恵器	甕						
第9回	14	須恵器	甕						
第9回	15	須恵器	甕						
第9回	16	須恵器	甕						
第9回	17	須恵器	甕						
第9回	18	須恵器	甕						
第10回	1	土師器	皿		14C		13		
第10回	2	土師器	皿		15C				
第10回	3	土師器	皿		15C				
第10回	4	土師器	皿		15C				
第10回	5	土師器	皿		15C		11.6		
第10回	6	土師器	皿		15C		7.6		
第10回	7	土師器	皿		15C		7.2		
第10回	8	土師器	皿		16C				
第10回	9	土師器	皿		16C				
第10回	10	土師器	皿		16C		9.6		
第10回	11	土師器	皿		16C		9.8		
第11回	1	珠洲	擂鉢		13C後半		30		
第11回	2	珠洲	擂鉢		13C末～14C		30.4		
第11回	3	珠洲	擂鉢		13C末～14C		28		
第11回	4	珠洲	擂鉢		13C末～14C		28		
第11回	5	珠洲	擂鉢		15C後半		26.4		
第11回	6	珠洲	擂鉢		13C末～14C				
第11回	7	珠洲	擂鉢						
第11回	8	珠洲	擂鉢						
第12回	1	珠洲	甕						
第12回	2	珠洲	甕						
第12回	3	珠洲	甕						
第12回	4	珠洲	甕						
第12回	5	珠洲	甕						
第12回	6	珠洲	甕						
第13回	1	瀬戸美濃	綠釉小皿	灰釉	14C末～15C前半		10		
第13回	2	瀬戸美濃	綠釉皿	灰釉	14C末～15C前半		10.6		
第13回	3	瀬戸美濃	綠釉皿	灰釉	14C末～15C前半		11		
第13回	4	瀬戸美濃	綠釉皿	灰釉	14C末～15C前半				6
第13回	5	瀬戸美濃	卽皿	灰釉	14C末～15C前半		10		
第13回	6	瀬戸美濃	卽皿	灰釉	14C末～15C前半		16		
第13回	7	瀬戸美濃	香炉		15C				4.2
第13回	8	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	16C後半(大窯)		10		
第13回	9	瀬戸美濃	天目茶碗	鉢	15C後半				
第13回	10	瀬戸美濃	天目茶碗	サビ鉢	16C前半(大窯)				4.6
第13回	11	瀬戸美濃	盤頭	灰釉	15C				15
第13回	12	瀬戸美濃	盤頭	灰釉	15C				
第13回	13	瀬戸美濃	盤頭	灰釉	15C				
第14回	1	青磁	碗		13C後半～14C前半				
第14回	2	青磁	碗		13C後半～14C前半				

遺物計測表(1)

回版番号	番号	種類	器種	軸	葉	年代	口径	器高	底径	高台径
第14回	3	青磁	碗			13C後半~14C前半				
第14回	4	青磁	碗			13C後半~14C前半				
第14回	5	青磁	碗			14C				
第14回	6	青磁	碗			15C				7
第14回	7	白磁	盤			15C				4.8
第14回	8	白磁	盤			16C				6.4
第14回	9	青白磁	梅瓶			13C				
第14回	10	青花	皿			17C中頃				6
第14回	11	青花	皿			17C中頃				5
第15回	1	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初				4
第15回	2	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初				4
第15回	3	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初				4.6
第15回	4	唐津	櫻花口	灰釉		16C末~17C初	11~11.4	3.2		4
第15回	5	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初				7
第15回	6	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初	12			
第15回	7	唐津	皿	灰釉		17C前半	12			
第15回	8	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初	13.8			
第15回	9	唐津	皿	灰釉		16C末~17C初	11	3.2		4.8
第15回	10	唐津	碗	灰釉		17C前半				4
第15回	11	唐津	碗	灰釉		17C前半				4.4
第15回	12	肥前系陶器	天目燒	鐵釉			11.5			
第15回	13	唐津	碗		18C		18.6			
第15回	14	唐津	鉢		18C					8.1
第15回	15	肥前系陶器	碗		18C					12
第16回	1	肥前系陶器	擂鉢							
第16回	2	肥前系陶器	擂鉢							
第16回	3	肥前系陶器	擂鉢							
第16回	4	肥前系陶器	擂鉢				40	17.6		14.6
第17回	5	肥前系陶器	擂鉢				32			
第17回	6	肥前系陶器	擂鉢				35.4			
第17回	7	肥前系陶器	擂鉢				40			
第17回	8	肥前系陶器	擂鉢				43			
第17回	9	肥前系陶器	擂鉢				41			
第18回	10	肥前系陶器	擂鉢				34			
第18回	11	肥前系陶器	擂鉢				41			
第18回	12	肥前系陶器	擂鉢							12.8
第19回	1	伊万里	紅皿		18C末~19C前半	4.8	1.4	1.6		
第19回	2	伊万里	紅皿		18C末~19C前半	6.2	1.6			1.8
第19回	3	伊万里	皿							6
第19回	4	伊万里	皿		18C後半~19C前半	14.4	3.8			9
第19回	5	肥前系	皿		18C					3.8
第19回	6	伊万里	皿		18C後半~19C前半					9
第19回	7	伊万里	皿		18C		13.8	2.5		7
第19回	8	伊万里	皿		18C		14.6	3.2		9.4
第19回	9	伊万里	皿		18C後半		12	4.2		7.6
第19回	10	伊万里	皿		18C後半		13	4		8
第19回	11	伊万里	皿				12.6	3.1		4.8
第19回	12	伊万里	皿		18C		12.2	3.5		4.2
第19回	13	伊万里	皿		18C後半		13.6	3.9		8
第19回	14	伊万里	瓶		18C末~19C前半					
第19回	15	伊万里	瓶		18C末~19C前半					4.4
第19回	16	伊万里	油壺		18C後半					5.1
第20回	1	伊万里	皿		18C					5
第20回	2	伊万里	皿		18C後半					3.4
第20回	3	伊万里	碗		17C後半		8.8			
第20回	4	伊万里	華表猪口		18C末~19C前半		8.4	5.8	8	
第20回	5	伊万里	碗		18C後半~19C前半		9.6			
第20回	6	伊万里	碗		18C		11.7	5.7	4.6	

遺物計測表(2)

回収番号	器種	種類	器種	年代	口径	器高	底径	高台径
第20回 7	伊万里	描鉢		18C前半				
第20回 8	伊万里(吻詰添付)	碗		18C	10.7	7.2		4
第20回 9	伊万里	広東碗		18C末~19C前半	11.2	6.2		6.3
第20回 10	伊万里	広東碗		18C末~19C前半				6.2
第20回 11	伊万里	広東碗		18C末~19C前半				
第20回 12	伊万里	碗		18C後半				4
第20回 13	伊万里	碗		18C		11	5.4	4
第20回 14	伊万里	皿		18C後半	12.2	4.8		3.8
第21回 1	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半				4.8
第21回 2	越中瀬戸	皿	灰釉					
第21回 3	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半				5
第21回 4	越中瀬戸	皿	鉄袖	18C				5.8
第21回 5	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半				4.3
第21回 6	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半	10.2	2.4		5.4
第21回 7	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半	11.2	2.6		5
第21回 8	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半				5
第21回 9	越中瀬戸	皿	灰袖	17C前半				6
第21回 10	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半				4.4
第21回 11	越中瀬戸	皿		17C前半	11.6	3		5.2
第21回 12	越中瀬戸	皿		17C前半	12	3.2		4
第21回 13	越中瀬戸	皿	灰袖	18C	11			
第21回 14	越中瀬戸	皿	灰袖 鉄袖	17C前半	12			
第21回 15	越中瀬戸	皿	鉄袖		13			
第21回 16	越中瀬戸	皿	灰袖	17C前半	14.6			
第21回 17	越中瀬戸	皿	灰袖	17C前半	11	2.2		5.4
第21回 18	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半				5
第21回 19	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半	10.6	2.2		4.8
第21回 20	越中瀬戸	広口皿	鉄袖	18C後~19C	12			
第21回 21	越中瀬戸	皿	鉄袖	18C後~19C	11	2.9	5.4	
第21回 22	越中瀬戸	皿	鉄袖	17C前半	12.3~13.3.5~3.8			5.8
第21回 23	越中瀬戸	皿	鉄袖	18C	10.6	2.4	3.8	
第21回 24	越中瀬戸	皿	鉄袖	18C	7.2	1.5	3.5	
第21回 25	越中瀬戸	折縁皿	灰袖	1/C前半	18.7			
第22回 1	越中瀬戸	丸碗	緑色釉	19C(幕末~明治)	8			
第22回 2	越中瀬戸	丸碗	緑色釉	19C(幕末~明治)				5.1
第22回 3	越中瀬戸	丸碗	鉄袖	19C(幕末~明治)	10			
第22回 4	越中瀬戸	丸碗	鉄袖	19C(幕末~明治)				5
第22回 5	越中瀬戸	丸碗	鉄袖		10.3	6.6		5.2
第22回 6	越中瀬戸	丸碗	鉄袖		9.5			
第22回 7	越中瀬戸	丸碗	鉄袖		10			
第22回 8	越中瀬戸	丸碗	鉄袖	17C	11			
第22回 9	越中瀬戸	丸碗	鉄袖	17C				5.2
第22回 10	越中瀬戸	丸碗	鉄袖		8.8	6.9	3.5	
第22回 11	越中瀬戸	描鉢	鉄袖	18C	10	7.1		5.5
第22回 12	越中瀬戸	丸碗	灰袖	18C	14			
第22回 13	越中瀬戸	碗	灰袖	18C				4.6
第22回 14	越中瀬戸	德利	鉄袖	17C前半				
第22回 15	越中瀬戸	集編	鉄袖	18C後半~19C				3.8
第22回 16	越中瀬戸	広口皿	鉄袖		10.2	6.7	11	
第22回 17	越中瀬戸	壺	サビ袖		7.2			
第22回 18	越中瀬戸	壺	鉄袖					4.2
第22回 19	越中瀬戸	広口壺	鉄袖	17C前半	14			
第23回 1	越中瀬戸	描鉢	鉄袖		15.2			
第23回 2	越中瀬戸	描鉢	鉄袖	17C前半				
第23回 3	越中瀬戸	描鉢	鉄袖		24			
第23回 4	越中瀬戸	描鉢	サビ袖	17C前半				
第23回 5	越中瀬戸	描鉢	サビ袖	17C前半				12
第23回 6	越中瀬戸	描鉢	鉄袖		27			

遺物計測表(3)

貯藏番号	器号	種類	器種	釉薬	年代	口径	器高	底径	高台径
第10回	12	瓦器	火桶蓋		近世以降	28.4			
第10回	13	瓦器	火桶						
第13回	14	瀬戸美濃	志野印	長石釉	17C前半				
第13回	15	瀬戸美濃	志野印	長石釉	17C前半				
第13回	16	瀬戸美濃	志野印	長石釉	17C前半				
第13回	17	瀬戸美濃	皿		18C			6.6	
第13回	18	瀬戸美濃	碗		19C前半			6	
第24回	1	肥前系陶器	折縁皿	灰釉	17C				
第24回	2	信楽	灯明受皿			9.4	2.1	3	
第24回	3	大軒焼	皿		幕末				7
第24回	4	人野焼	皿		幕末	13.8	4.55		8.2
第24回	5	京焼系陶器	碗	灰釉				4.9	
第24回	6	京焼系陶器	碗	灰釉		13.2	5.2		5
第24回	7	越前	理		16C				
第24回	8	越前	甕		16C				
第24回	9	越前焼	擂鉢		16C	27			
第24回	10	越前焼	擂鉢		16C			6	

遺物計測表(4)

図版





表土剥ぎ取り状況（南より）



表土剥ぎ取り状況（北より）



発掘調査状況（南より）



発掘調査状況（北より）



遺跡より毛勝山、剣岳を望む



遺跡完掘状況（北より）



遺跡完掘状況（南西より）



遺跡完掘状況（南より）



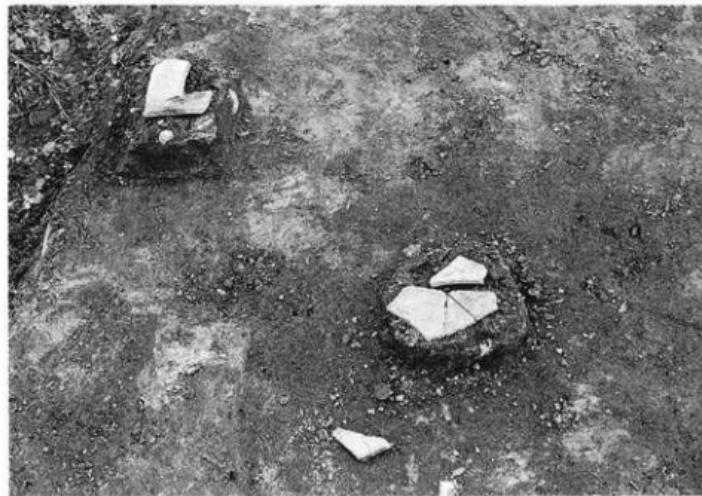
遺跡中央部における礫層の堆積



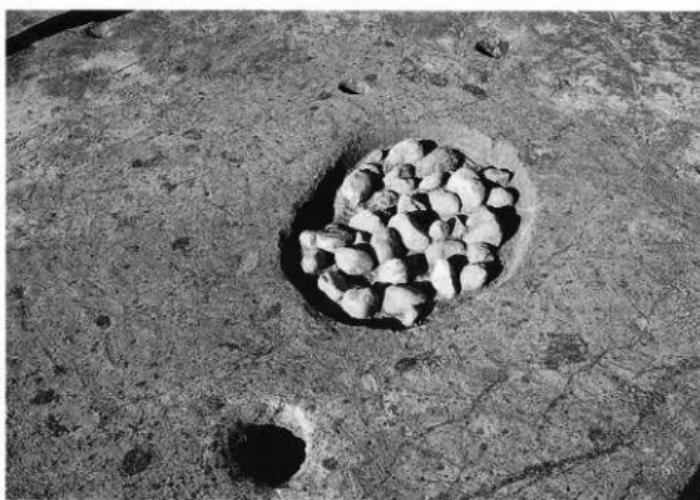
柱穴状ビット群



柱穴状ピット群における須恵器出土状態



柱穴状ピット群における須恵器出土状況



土坑SK13



土坑SK03



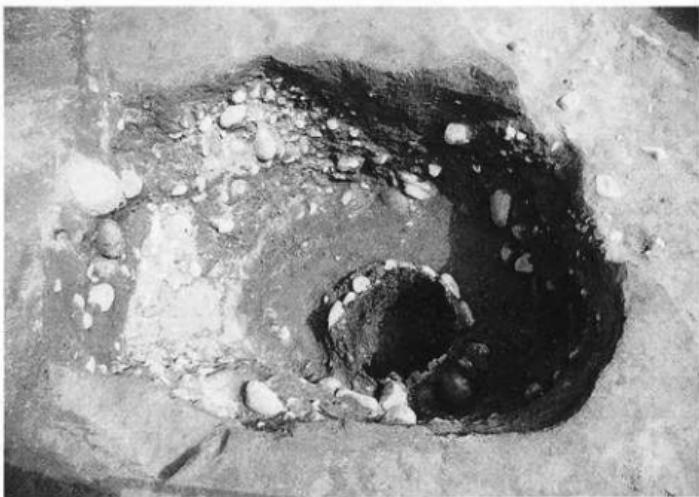
土坑SK04



溝SD01, SD02



井戸SE01



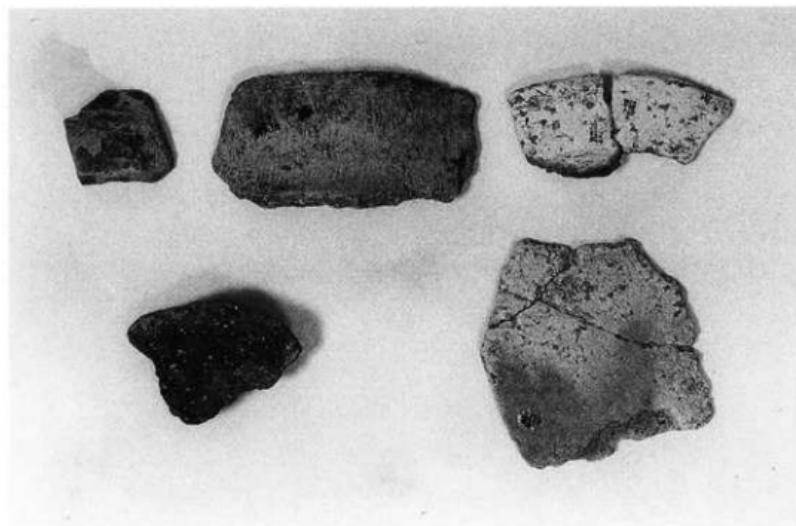
井戸SE01



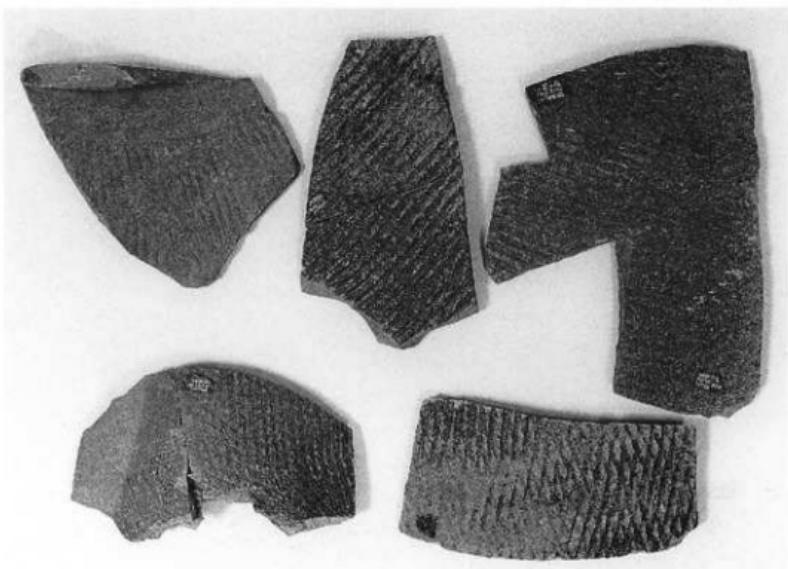
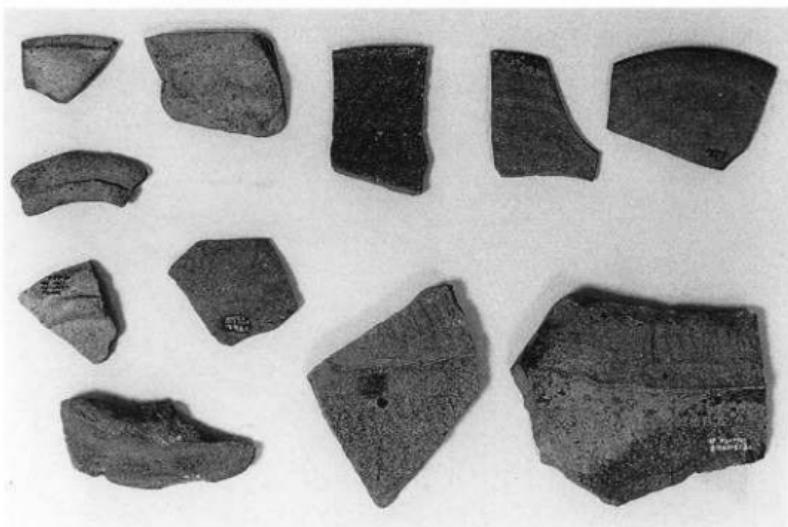
井戸SE01



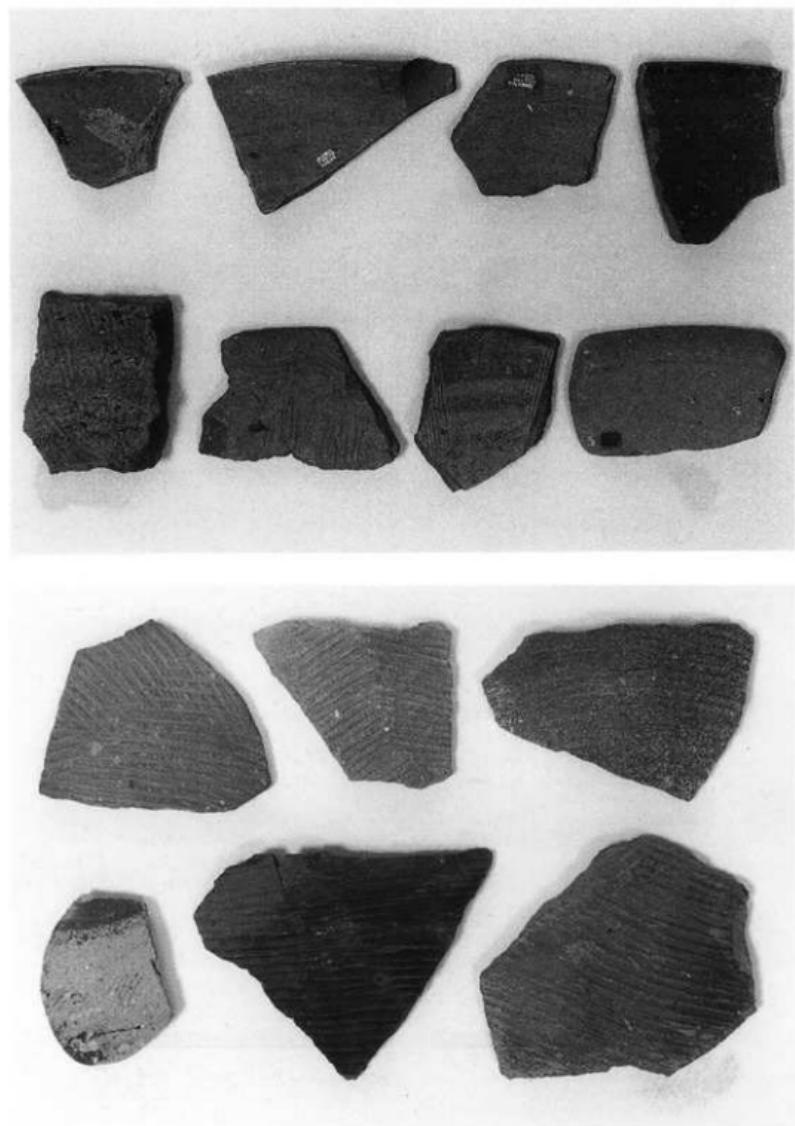
井戸SE01



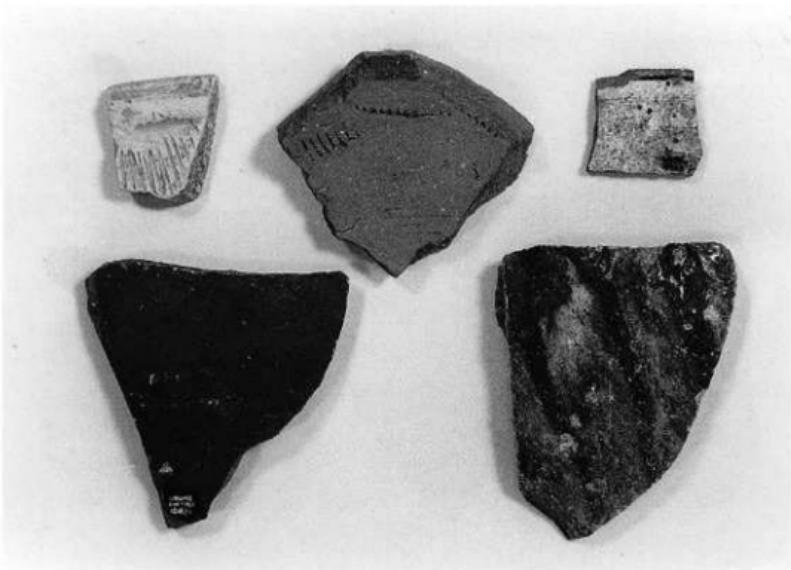
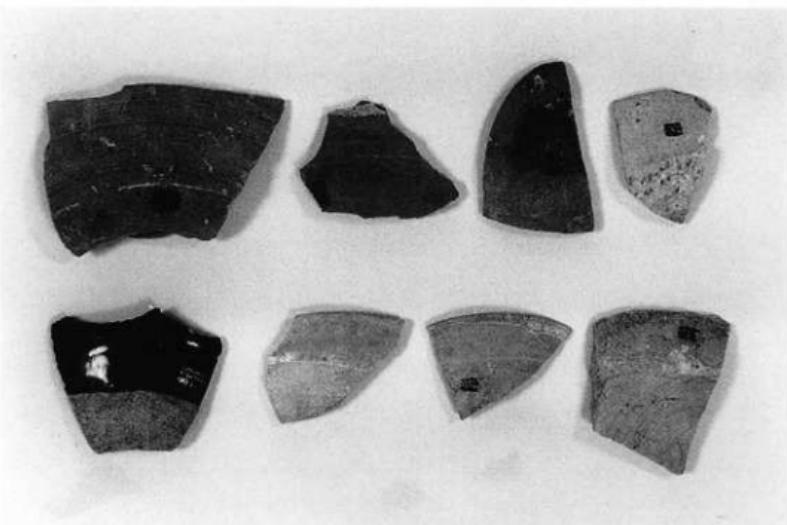
上：試掘調査出土 下：弥生土器



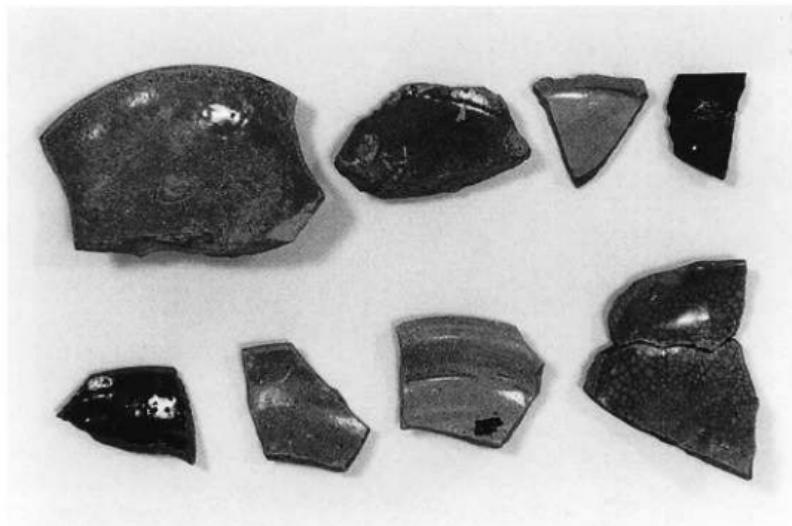
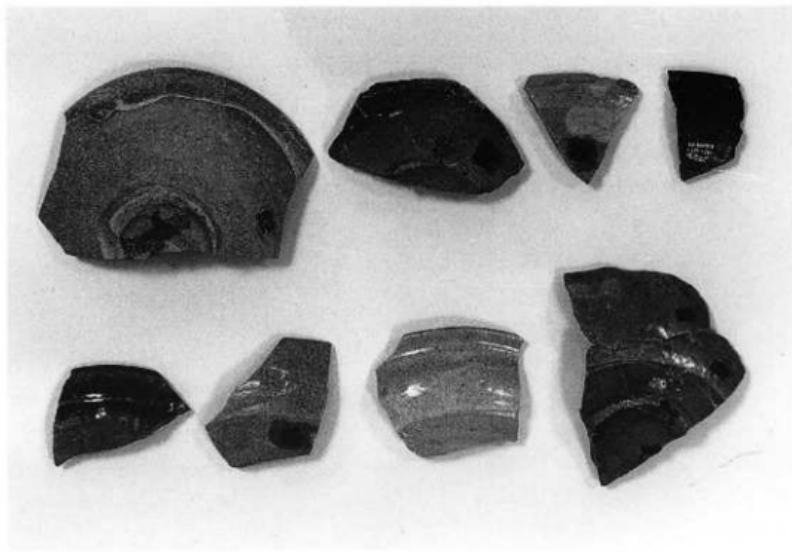
須惠器



珠洲



上：瀬戸・美濃 下：越前他



肥前系陶器



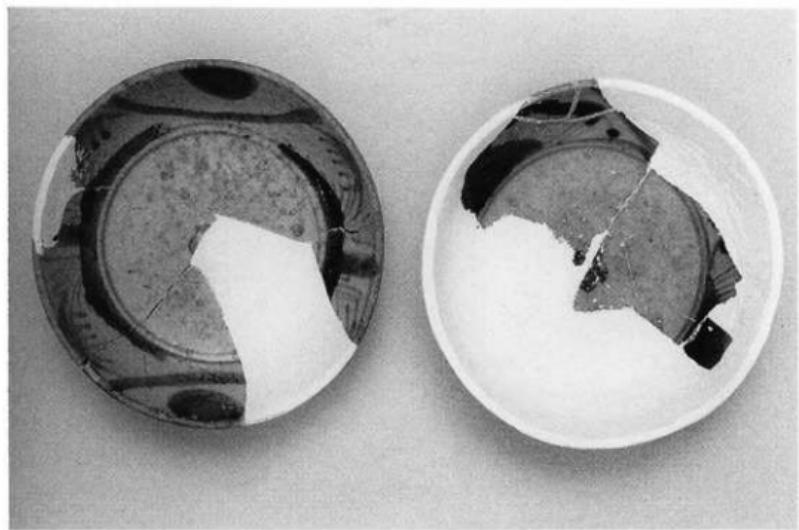
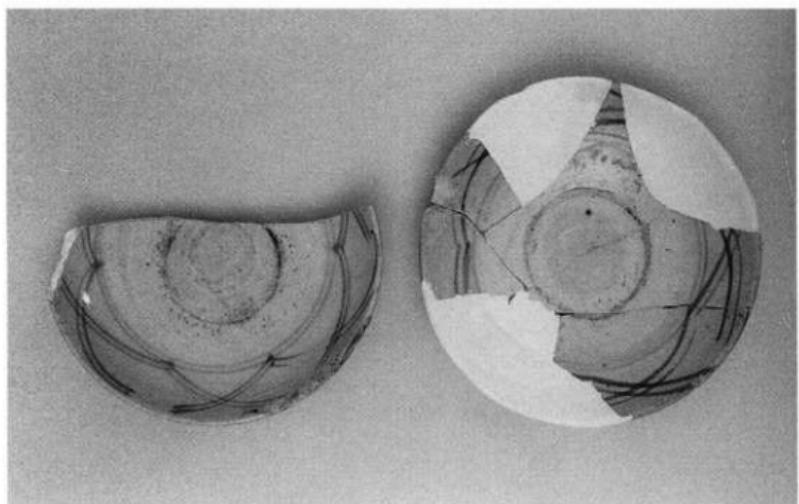
肥前系陶器



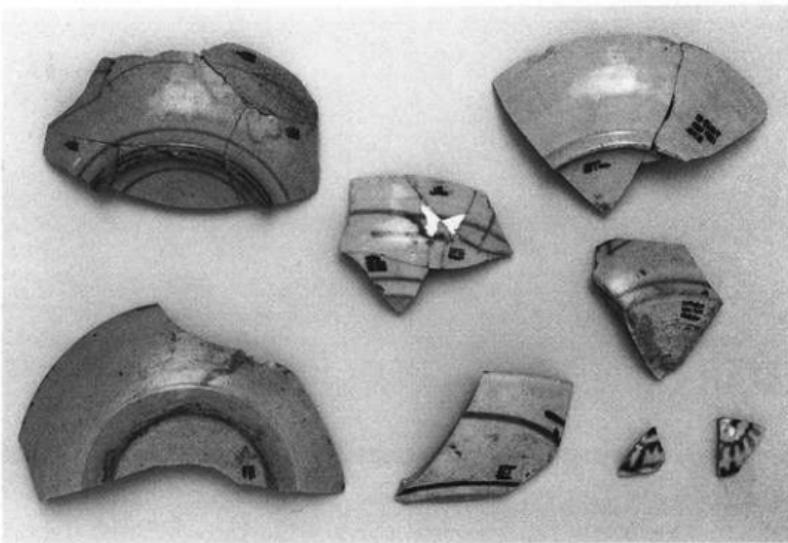
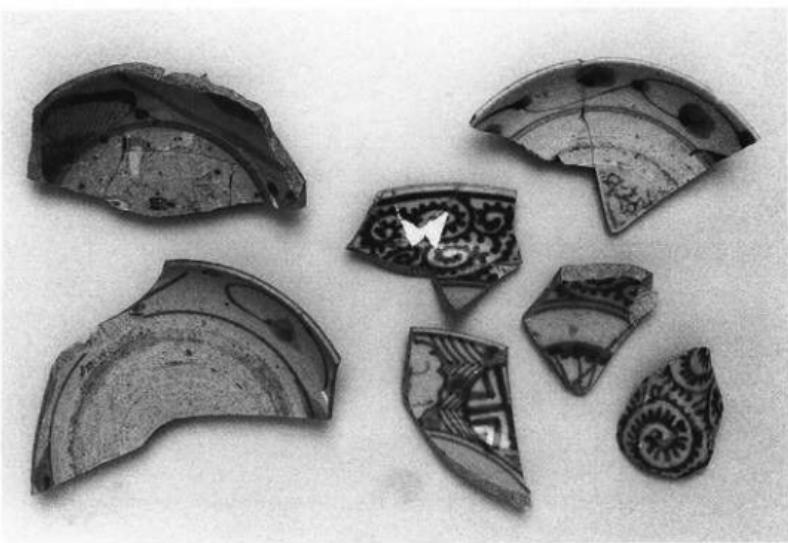
肥前系陶器



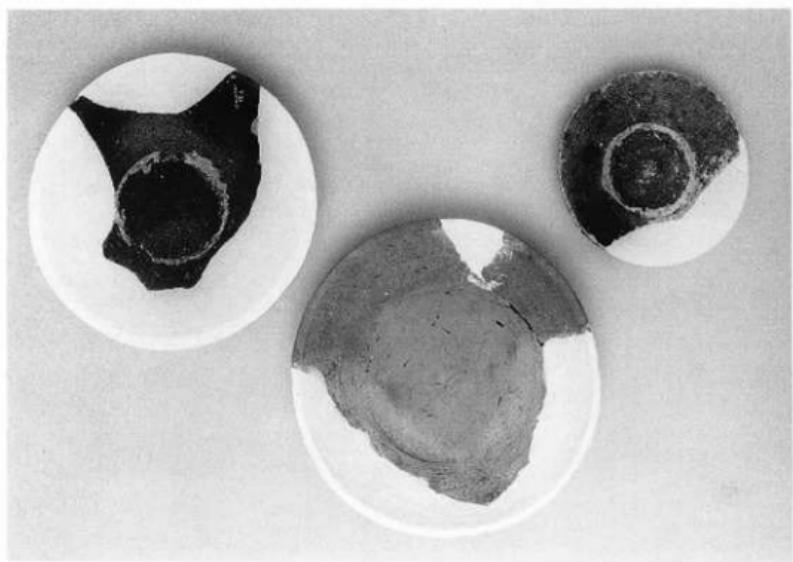
肥前系陶器



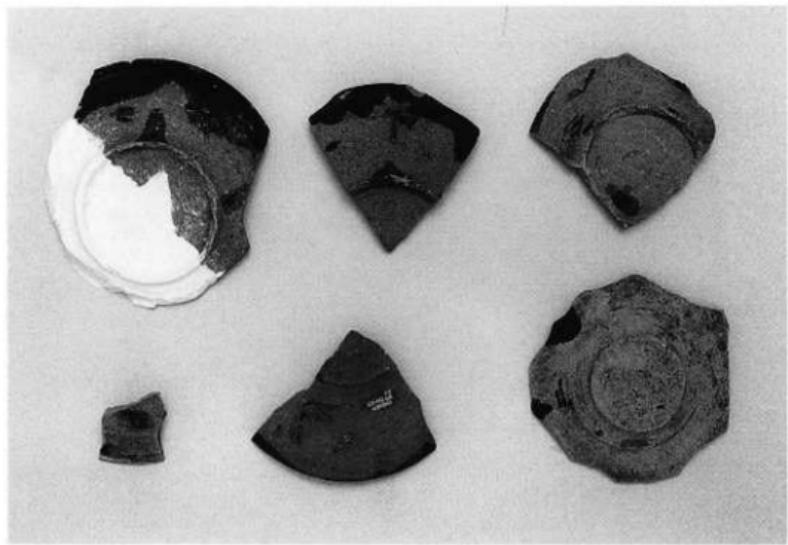
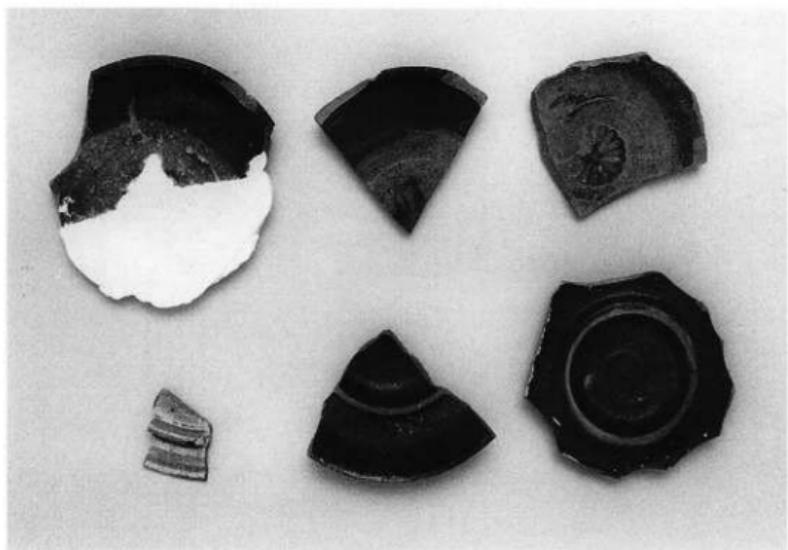
伊万里



伊万里



越中瀬戸



越中瀬戸



越中瀬戸



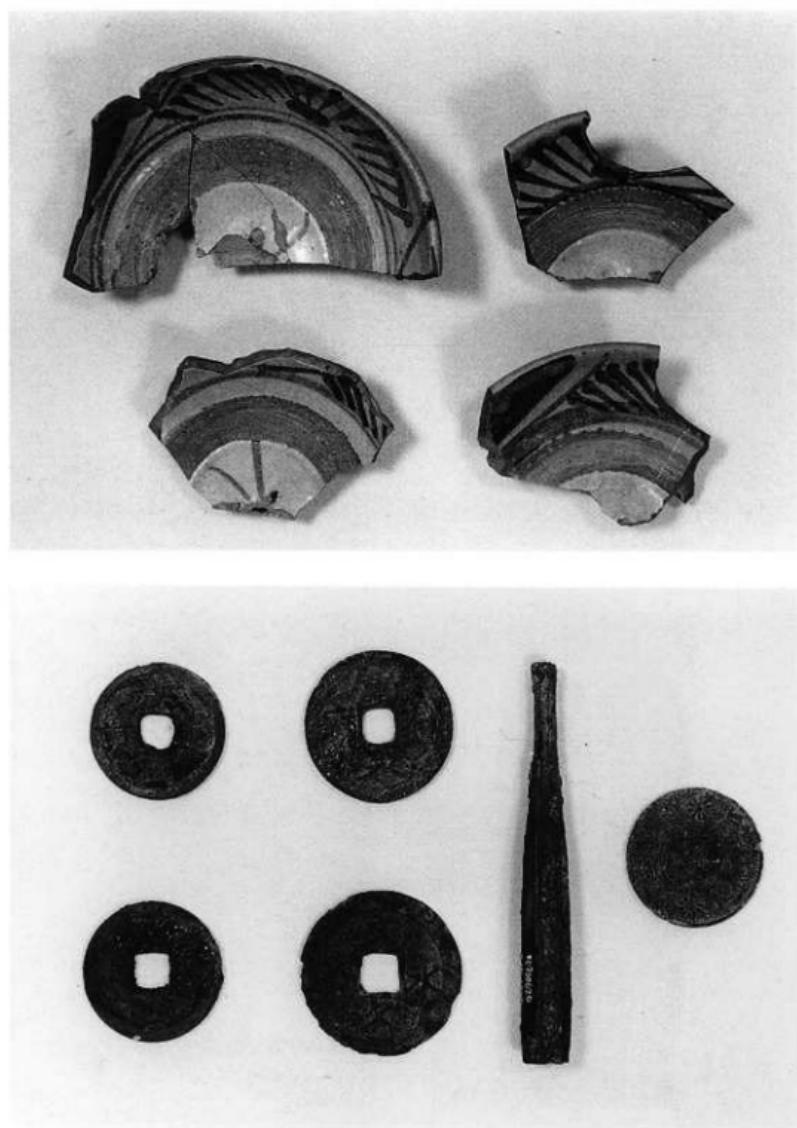
越中瀬戸



越中瀬戸



越中瀬戸・伊万里



上: 大野焼 下: 古銭 他



石臼 下駄

報告書抄録

ふりがな	いでいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	出遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
編集者名	麻柄一志、塩田明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	〒937 富山県魚津市积迦堂1-10-1 TEL0765-23-1045
発行年月日	西暦1997年3月27日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
出遺跡 出1437外	富山県魚津市 市町村	16204	遺跡番号 204107	36度 47分 45秒	137度 24分 30秒	960603～ 961025	5,400 魚津滑川バ イバス建設 事業に伴う 発掘調査

所取遺跡名	主別	主な遺構	主な遺物	主な遺物	特記事項
出遺跡	集落遺跡	近世	井戸 1基 土坑 25基 溝 3基 ピット	弥生土器、須恵器、土師 器、珠洲、青磁、白磁、 瀬戸美濃、唐津、伊万里、 越中瀬戸、硯、石臼、下 駄、キセル、古錢	弥生中期から近現 代にいたる集落

